



芙蓉之塔

芙蓉は富士山の雅称、静岡県藤枝基地で編成された芙蓉部隊は、昭和20年5月から終戦まで岩川基地から沖縄方面の夜襲に出撃、藤枝部隊以来百余名の戦死者を出した。その慰霊のため昭和53年1月に建立された。(由来記より)

会報
特攻
令和6年8月

第151号

公益財団法人 特攻隊戦没者
慰霊顕彰会
編集人 金子敬志
発行人 石井光政
印刷所 株式会社 SGネクス
ホールディングス

目次

暑中お見舞い申し上げます・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・理事長 岩崎茂 3 2

巻頭言・・・理事 金子敬志 7 4

各地慰霊祭等報告
旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式・・・・・・・・・・・・・評議員 中村敏弘 4

都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・編集長 金子敬志 7 4

第41回宮崎特攻基地慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 高松真希 9 9

戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭
戦艦「大和」戦没七十九年追悼式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・理事 鮎田英一 11 11

万世特攻慰霊碑第53回慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・理事 原島淳子 13 13

第65回出水市特攻碑慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 福江広明 14 14

国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭及び慰霊の集い
沖繩県「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 及川昌彦 17 17

第33回秋田県特別攻撃隊招魂祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 宮本雅史 21 21

第70回知覧特攻基地戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 中村敏弘 22 22

第12回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・理事 金子敬志 27 27

第58回特攻殉国の碑慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 岩崎茂 28 28

令和六年筑波海軍航空隊慰霊の集い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 原知崇 29 29

千葉県特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・編集長 金子敬志 30 30

三重海軍航空隊予科練生戦没者等慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 中村敏弘 33 33

義烈空挺隊出撃79周年慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 倉方桃代 35 35

第57回豫科練戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・評議員 原島淳子 36 36

第54回指宿海軍航空基地追悼式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・専務理事 石井光政 37 37

会員等投稿
多田野語録・・・会員 多田野弘 39 39

抑止力の戦史的観察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・会員 中垣秀夫 41 41

連載 山ある記27・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・会員 池田康博 48 48

顕彰譜(16)・・・

芸欄 歌俳柳の広場

短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

事務局からの報告等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

挿絵提供 空自OB 宇山氏 55 54

署中お見舞い申し上げます

公益社団法人隊友会

会長 折木良一
理事長 岩崎茂
常務理事 徳地秀士
常務理事 岩田清文
常務理事 山村浩
事務局長 藤井貞文

公益財団法人陸修偕行社

会長 森勉
相談役 熊谷猛
理事長 火箱芳文
副理事長 岩田清文
専務理事 内田益次郎
事務局長 本庄俊弘

公益財団法人水交会

会長 杉本正彦
副会長 佐賀幾雄
理事長 河野克俊
専務理事 村川豊
事務局長 徳丸伸一

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 杉山良行
副会長 丸茂吉成
副会長 片山隆仁
副会長 藤田信之
副会長 谷井修平
副会長 福永充史
専務理事 荒木文博

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 安倍昭恵
理事長 山下輝男
副理事長 石井光政
専務理事 伊藤隆
常務理事 國澤輝生

東郷神社

宮司 福田勉
会長 伊藤康成

東郷会

副会長兼 理事 永田美喜夫
編集長 伊藤和雄
事務局長 足立晴夫

一般社団法人日本郷友連盟

会長 森勉
副会長 廣瀬清一
専務理事 越智通隆
常務理事 富田稔
理事 袴田忠夫
理事 佐藤誠喜

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長 藤田幸生
理事長 岩崎茂
副理事長 岡部俊哉
専務理事兼 事務局長 石井光政
理事 白田智子
鮎田英一
大穂園井
久納雄二
福江広明
阿部軍喜
羽渕徹也

監事

「巻頭言」
公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 岩崎 茂



今年もまた、暑い暑い夏の到来である。特に今年の夏は長期予報どおりの猛暑の日々が続いている。今年の8月15日で、終戦から79年である。そして、来る10月25日は、関大尉以下の特攻隊員が最初の特別攻撃に成功し、散華されてから、80年である。当に「光陰矢の如し」である。

一般的に、月日が経過すれば、日々疎くなり、忘れてしまうことも多くなる。しかし、我々には、決して忘れてはいけない事がある。著名な歴史家のトインビー

が「民族(国)が滅びる三つの条件」を述べている。「理想を失ったとき」、「物事を数量で見るとなつた時」、「そして「歴史を失ったとき」の三要件である。我が国の現状を冷静に鑑みれば、これらの三要件が既に起こりつつあるのでは?と思われる。そして、いろいろな方々が各種問題を「戦後教育の問題」と他人事のように片づけてしまうことがある。しかし、私は、我々自身の問題として捉えるべきではなからうか?と考える。私達は、この国を今後も維持・発展・繁栄させるために、そして私達が精神的支柱を失わない様に、今一度、この国の事を、そして我々自身の事を再考し、我々が見失いつつある「理想」や「歴史」を取り戻す努力をすべき時期ではなからうか?

私は、「今、私達が、この様に平和な国で、かつ繁栄を享受できているのは、先人の方々の「血と汗と涙の賜物」であることに思いを馳せ、改めて先人の方々に、そして御英霊に対し感謝申し上げるとともに、御英霊の御遺志を私達の後輩にも語り継ぐことをお約束申し上げる所存である。今年、特攻隊の節目の年である。特攻隊戦没者慰霊顕彰会として、特攻隊の意義を再考し、今までよりも増して、

特攻隊の史実を後世に伝える努力をしていこうと考えている。特に10月25日には、最初の特攻隊が離陸したフィリッピンのマバラカット西飛行場で、現地の自治体や日本大使館のご協力・ご支援を頂き、例年よりも多くの方々のご参加を得て慰霊行事を執り行う方向で調整中である。会員の皆様方にもこの様な趣旨にご賛同いただき、出来れば、まだ当会に入会されておられない方々にもお声を掛け、全国各地での慰霊行事にご参加いただきましたようお願い申し上げます。



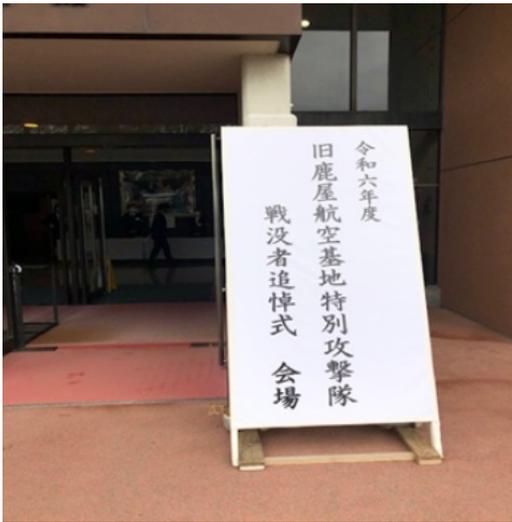
令和6年度(第67回)旧鹿屋航空基地
特別攻撃隊戦没者追悼式

評議員

中村 敏弘

令和6年4月6日(土)、鹿児島県鹿屋市主催による「令和6年度(第67回)旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」が鹿屋市文化会館にて執り行われました。この追悼式に石井事務局長及び福江理事とともに理事長の代理として参列する機会を得ましたので報告します。

当日は残念ながら雨模様となったため、小塚公園慰霊塔前広場から鹿屋市文化会館へ場所が変更されましたが、文化会館周辺の桜並木が英霊にそつと寄り添って



戦没者追悼式会場(鹿屋市文化会館)

いるかのようにほぼ満開でありました。

1 追悼式の概要

鹿屋の地は、先の大戦中、本土最南端海軍航空基地として多くの特攻隊員が飛び立った地であり、小塚公園慰霊塔には908柱の御霊が祭られています。

式典には主催者の中西茂鹿屋市長をはじめ、鹿屋市市議会議長・議員、鹿児島県議会議員、海上自衛隊第1航空群司令の大西海将補他多数の来賓のほか、44遺族105名を含め、約300名が参加しました。

まず、主催者である鹿屋市長が式辞を述べたのち、市議会議長、第1航空群司令、そしてご遺族代表の3名の方々が追悼の言葉を述べられ、献花、式電披露、平和へのメッセージ朗読と式次第に従い斎行され、追悼式は滞りなく終了しました。なお、特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して石井事務局長が献花しました。

中西茂市長は式辞で、「先人たちの歩みに思いをはせ、戦争の惨禍を繰り返すことがないよう後世に語り継ぐ」と誓われました。

また、ご遺族代表し、特攻隊員のおい、茂木尚さん(札幌市在住)が「ロシアによるウクライナ侵攻やハマスとイスラエルの紛争などテレビから流れる映像は実



参列者による献花

際の戦争とはどういふものかを物語っています。一度戦端を開くと悲惨な現実が待っています。再び戦争の惨禍に巻き込まれることのないよう努力を続けなければなりません」と追悼の言葉を述べられました。

鹿屋市が毎年募集している「平和へのメッセージ」で入賞した鹿屋市在住の女子中学生(12)は、「鹿屋の史料館で家族に宛てた遺書を見たときに『行きたくない、本当は離れたくない』と思ったはずなのに、それすら叶わず覚悟を持って

書いた最期の言葉だと思つと、胸が苦しくなりました。日本の歴史を忘れてはいけない」と平和への願いを書いた作文を朗読しました。

追悼式の開式直後と閉式直前には、海上自衛隊鹿屋航空基地隊員により編成された儀仗隊による英霊に対する敬礼が厳かに実施され、追悼式会場には威厳に満ちた空気が漂っていました。

2 所見等

追悼式はコロナ禍で一時縮小された時期があつたものの、今年は例年通りの規模で全国各地から多くのご遺族の方々が参集され実施されたが、ご遺族の高齢化等を考えると今後参集される方々は確実に減少していくことが予想されます。そのような中、鹿屋市は若い世代に如何にバトンをつなげていくかということを考え、その取り組みの一つが「平和へのメッセージ」なのだと感じました。私事ではありますが、平成29年から約1年半、海上自衛隊第1航空群司令を拝命していた頃の追悼式が思い出され、英霊を片時も忘れずに感謝の念をもって尊敬し、日本をこれからもしっかりと守っていくという決意がここ鹿屋では受け継がれていることに安堵しました。

なお、私たちは参加することができな

かつたものの、追悼式当日の夕方、鹿屋市民有志による灯籠流しが市内を流れる肝属川の河川敷にて行われました。この催しは、出撃前に特攻隊員が機上で最後に味わつたという「海軍タルト」を平成29年に復活させたお菓子屋（鹿屋市内所在の菓子店「富久屋」）の女将さんが私的に10年近く前から実施しているものです。この「海軍タルト」の売り上げの一部で灯籠を作成しており、今回の追悼式に参加された何組かのご遺族も参加されたとのことでした。来年は旧鹿屋航空基地から特攻隊が出撃して80年という節目を迎えるが、主催者の女将さんはこの灯籠流しをより盛大に催したいとの想いをもっているとも聞いており、多くの関係者が何らかの形で関与出来ればと感じた次第です。

【追悼の言葉（遺族代表）】

本日ここに第六十七回旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式が挙行されるにあたり、戦争という過酷な運命のもと祖国日本の為、愛する家族の為に尊い命を捧げられた九百八柱の御霊に対し、遺族を代表して謹んで追悼の詞を申し述べます。

戦争資料によれば特攻作戦は、昭和十八年六月に海軍侍従武官城英一郎大佐が、

大西滝次郎航空本部総務部長に「特攻航空隊」という体当たり攻撃を目的とする部隊の編成を提言したのが始まりとされています。その八月には黒島亀人軍令部第二部長、中沢佑軍令部作戦部長が海軍首脳に航空特攻の必要性を強調して有人爆弾「桜花」人間魚雷「回天」など特攻兵器の開発を続け、昭和十九年九月には「特攻部」を設立し、十月二十一日から二十五日にかけてフィリピンの、マバラカット、セブ、ダバオの各飛行場から敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊、菊水隊が特攻作戦の第一陣として出撃し散華致しました。そしてここ旧鹿屋航空基地では昭和二十年三月十一日菊水部隊梓特別攻撃隊を皮切りに、六月二十六日の銀河隊まで九百八名の特攻隊員が出撃し還らぬ人となりました。

私事ではございますが、伯父茂木忠は昭和十八年十二月十日、学徒出陣により横須賀第二海兵団に入団しました。昭和十八年は二月七日ガタルカナル島撤退、四月十八日山本五十六連合艦隊司令長官戦死、五月十三日アッツ島全滅と日本にとっては圧倒的に不利な戦況にありました。その後伯父は、昭和十九年二月土浦航空隊で飛行予備学生の基礎教程、六月谷田部航空隊で赤トンボの飛行訓練、

九月零式練習戦闘機の飛行訓練を経て、昭和二十年三月二日特別攻撃隊に選抜されました。そこで新たに二か月近くの特攻訓練を受け、四月二十九日ここ鹿屋基地に到着しました。生まれ故郷の北海道から遠く離れた最後の地にどんな思いでめぐりついたのかと思うと胸が熱くなります。その後の出撃待機を経て、五月十一日午後六時五十三分、第七昭和隊員として出撃し、午前十時十八分特攻戦死しました。

弱冠二十二歳、飛行訓練を始めて一年足らず、搭乗時間はわずか百時間あまりでした。同じ第七昭和隊の安則盛三中尉と小川清少尉は米空母バンカーヒルに突入し死者三百九十五名負傷者二百六十四名の大損害を与えました。

一昨年のロシアによるウクライナ侵攻、昨年来のハマスとイスラエルの紛争、テレビから流れるニュースは実際の戦争とはどういふものかを物語っています。一度戦端を聞くと悲惨な現実が待っています。我が国の周辺には主義主張や価値観の大きく異なる国々が存在しますが、私はここ鹿屋基地から出撃して散華した九百八柱の特攻隊員が、命をかけて守ろうとしていた日本が、再び戦争の惨禍に巻き込まれることのないよう努力を続け



追悼の言葉の奉読

なければなりません。終戦から七十九年が経過し、散華した特攻隊員の親は既になく、その兄弟姉妹も高齢化して、追悼式に参列するのは甥姪の世代となりましたが、鹿屋市は例え遺族が一人になっても追悼式を開催する、という有難いお話を伺いました。私はその心意気に応えるべく、体力の続く限り参列を続けようと思います。最後になりましたが、この追悼式の開催にご尽力くださいました中西市長様、福祉政策課を始め鹿屋市職員の皆様、海上自衛隊鹿屋基地の皆様、そし

て第一回の追悼式依頼ご支援くださっている地元の皆様にご心より感謝申し上げます。令和六年四月六日

札幌市 茂木 尚

【平和へのメッセージ】「このことは忘れてはいけない」

私は、平和を考える授業をきっかけに、SDGsと関係づけながら、戦争の事について学んでいます。先日、校外学習で戦争の時の歴史を知ることができた鹿屋航空基地史料館や太平洋戦争中に飛行訓練が行われた串良海軍航空基地の跡地にできた平和公園に行ってきました。そこでは、これまで私が考えたこともなかった事実を知り、新しく学んだこと、感じたことがたくさんありました。

まず、太平洋戦争末期、鹿屋航空基地周辺の基地からは、千人を超える海軍軍人が特別攻撃隊員として南方に出撃し、若き尊い命を散っていったということですが、日本で最も多くの特攻隊員が飛び立った場所が鹿屋海軍航空基地だったということを知り、この鹿屋が特別な場所なのだということを強く感じました。次に、飛び立っていった隊員のほとんどが十六歳から二十一歳という若い人たちであったことです。本当は、幸せに楽しく生活



「平和へのメッセージ」の朗読

したいはずだったのに、自分達の、そして未来を守るために戦いに行った隊員たちは、すごいと思います。私には、死を覚悟するという気持ちはよくわかりません。本当は、すごく怖く、すごく辛かったです。それを大切な人たちのためにと、怖いという姿を見せず、辛くない、悲しくない、大丈夫と自分に言い聞かせ、飛び立っていったのではないかと想像します。

また、史料館の中には、ケースに入れて大切に展示された遺書がありました。

死を目の前に、飛び立つ自分の気持ちよりも見送る家族や大切な人の気持ちを一番に考えている言葉ばかりでした。「お母さん。お母さん。」一言一言に行きたくない、本当は離れたくないと書きたかったはずなのに、それすら叶わず、覚悟を持って書いた最後の言葉だったと感じました。

私が、今生きていること、生まれてくることができたこと、それ自体が隊員たちの命を犠牲にしても日本を戦争から守ろうと戦ってくれたおかげだと、感謝の気持ちでいっぱいになります。遺書を読み終え、一人一人飾られた写真を見直し、こういうことが二度と起こってはいけないと改めて強く誓いました。

今、私たちは平和な日本で暮らしています。だからこそ、日本の歴史を忘れてはいけないのだと思います。私は、これから戦争でなくなってしまう人たちの思いをしつかりと心に止め、一日一日を大切に、今ある生活、家族、友達、平和な日々感謝しながら行きたいと思いません。

都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭

編集長 金子 敬志

令和6年4月6日(土) 宮崎県都城市都島町都島公園(旧陸軍墓地)内にある都城特攻振武隊慰霊碑「はやて」の前に、令和6年度都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭が執り行われました。

この慰霊祭に参列させて頂きましたので、概要と所見を述べます。

一 慰霊祭の概要

本慰霊祭は、都城特攻振武隊慰霊碑に合祀されている都城西・東飛行場を出撃して戦没した特攻戦死者79名と援護隊などとして戦没した隊員64名の143名を慰霊するもので、最初の出撃日が昭和20年4月6日であったので、それに合わせて毎年4月6日に斎行されます。式典は10時30分から執り行われ、式次第は次の通りです。

- 1 開式
- 2 黙とう
- 3 祭文奏上
- 4 追悼の辞
- 5 献茶の儀
- 6 献花
- 7 来賓あいさつ
- 8 献詠



テント内に会場が設けられている

9 平和へのメッセージ
10 遺族代表あいさつ
11 閉式

当日は雨模様であり、式典の後半からは雨も強くなる生憎の天気でしたが、会場にはしっかりとしたテントが設置されており式典の進行に支障がなかった事には感心しました。

しかし、駐車場の係りの方や会場における勤務員の方は雨に濡れながらの作業となり、ご苦労されたものと思います。参加者は79名、ご遺族は9名との事で

した。

先に記したように、式の半ばから雨が強くなりましたが、式典は粛々と行われ約50分で終了しました。



都城特攻隊慰霊碑「はやて」

二 所見

コロナ禍後の久しぶりの開催で、コロナ前の約100名の参加者に比べ若干の減少がありましたが、暫くぶりの開催と天候の影響ではないかと思えます。

ご遺族等は各地慰霊祭と同様に高齢化による減少が目立ちますが、都城市長が奉賛会会長を務めておられ、市の行事として定着しているようですので、本慰霊祭は来年以降も継続されると思います。

当日の駐車場は都城歴史資料館の駐車場が使用されており、慰霊祭会場へはバ

ス輸送が実施されていきましたので、慰霊祭終了後、資料館を見学しました。慰霊祭参加者は、その旨受付で申し出れば無料で見学出来ます。

館内は、旧石器時代から平成の大合併まで、都城盆地の歴史を発掘調査の出土品や古文書などの収蔵品、写真、パネルが展示されており、一室に特攻関係の資料が展示されています。

大きな資料館ではありませんが、興味深い展示が多く、楽しめるものでした。



第41回宮崎特攻基地慰霊祭に参列して

評議員 高松真希

令和6年4月7日(日)に、宮崎県宮崎市赤江の宮崎特攻基地慰霊碑の前で宮崎特攻基地慰霊祭後援会が主催する「第41回宮崎特攻基地慰霊祭」が斎行され、弊顕彰会から金子敬志編集長と共に参列させて頂いたので報告する。

宮崎ではこの数日間雷を伴う雨が降り続いていたが、慰霊祭当日は雨の天気予報を覆して曇りとなった。

コロナ禍には慰霊祭の自粛が続いていたが、今年は5年ぶりに以前の規模に戻されて、旧隊員、ご遺族、地元の小中学生、宮崎市民ら約130名が参列し、宮崎基地から飛び立った特攻隊などの英霊385柱と、宮崎県出身者で宮崎基地以外の基地から発進した英霊414柱、合計799柱の英霊に鎮魂と平和の祈りを捧げられた。

かつて多くの特攻隊員が飛び立たれた旧日本軍の特攻基地「宮崎基地(赤江飛行場)」のあった場所には現在「宮崎ブルーベンビリア空港」があり、宮崎の玄関口となっている。そのため宮崎特攻基地慰霊碑は、宮崎ブルーベンビリア空港に隣接している。

定刻通り11時から執行された慰霊祭の式次第は次の通りである。

1 開式の辞

2 国家斉唱並びに国旗の掲揚

3 黙祷

4 追悼の辞(主催者代表 宮崎特攻基地慰霊祭後援会会長 後藤徹夫氏)

5 慰霊のことは(宮崎市長代理とご遺族代表)

6 遺書朗読(地元の高校生2名)

7 献花

8 作文披露(赤江小学校卒業生3名)

9 電報披露

10 吹奏楽演奏(赤江小学校吹奏楽部)

11 中止

閉式の辞

宮崎特攻基地慰霊祭で特筆すべき点は、参列されている方の中に多くの小学生、中学生やお子様連れのご家族、そして地元の小・中学校の校長が含まれていることである。また、先述の式次第をご覧頂いても分かるように、慰霊祭行事の多くの部分で小・中・高校生の生徒たちがその執行に深く関わっていらっしゃるのとだ。

これは、宮崎市の小学校で繰り返し行われている平和学習と、宮崎特攻基地慰霊祭後援会会長の尽力に他ならないと思

われる。地元の方々が老若男女問わず一丸となり、長い時間をかけて先の戦争や未来の平和と対峙されているのを感じる。

その具体例として、戦争や平和に対する学習を繰り返し行うことや、語り部を通し児童が戦争当時の話を聞く機会に触れていること、地元の戦争遺跡の見学や修学旅行で鹿児島県知覧の特攻平和会館を訪れること、また、赤江小学校では6年生の児童が戦争や平和に対する1年間の学習成果として、地元の方々を招いて戦争に関する演劇を行うことなど、学校毎に多角的な取り組みが挙げられる。

その結果、子供たちが戦争や平和を自分の問題として捉え、いまのロシアとウクライナの戦争にも思いを馳せ、自分には何が出来るかを真剣に考える姿には胸を打たれた。

慰霊と顕彰、そして平和学習への取り組み方について、私にとっても非常に勉強になる慰霊祭であった。

ところで今回は金管楽器への落雷の懸念があったため、赤江小学校の吹奏楽部の演奏が中止となった。慰霊祭に向けて、吹奏楽部の皆様は様々な思いを込めて一生懸命に練習をされたことと思う。聴くことは叶わなかったが、気持ち届いた。この場を借りてお礼を申し上げます。



慰霊祭会場の様子



花に飾られた「鎮魂の碑」

碑前に飾られた折り鶴



第57回 戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊
戦没将士慰霊祭

理事 鮎田英一

令和6年4月7日(土)、鹿児島県徳之島伊仙町犬田布岬において「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」が斎行されました。数日来の雨模様で、この日も東シナ海から太平洋にかけて、停滞前線が長く東西に横たわり強い雨風が心配されましたが、幸いにも式典の間は、空を覆う厚い雲間から雨は降らず、風も穏やかでした。

吉田満氏が『戦艦大和の最期』で大和艦隊沈没の地点と書いた徳之島西方沖(後に坊ノ岬沖と判明)を臨む犬田布岬に、特攻艦隊戦没将士の慰霊塔が建立されたのは昭和43年のことであり、以来、大和が沈んだ4月7日には毎年絶えることなく慰霊祭が営まれてきました。

この慰霊塔は中村晋也・鹿児島大学名誉教授(文化勲章受章者の彫刻家)の設計による、大和の艦橋と同じ高さ24メートルの、戦死者を悼む「合掌」をモチーフとした鉄筋コンクリート製建造物で、塔中央の碑銘は高松宮宜仁殿下が揮毫されたものです。しかし長年、風雨にさらされ激しく老朽化が進んだため、伊仙町は全国からクラウドファンディングによ



修復なった慰霊塔前での祝詞奏上

り浄財を募り、さらに町の予算も合わせ約8700万円をかけて塔を抜本的に修復、3月末に塔は再びその荘厳な姿をよみがえらせました。

13時40分からの式典は、高麗芝の手入れが行き届いた慰霊塔前広場に、仮設テントと折り畳み椅子が並べられ、参列者約200名が着座して始まりましたが、それまでの間、那覇基地から来島した航空自衛隊南西音楽隊により、「海ゆかば」



西犬田布婦人会による鎮魂の舞

「軍艦行進曲」「ふるさと」「里の秋」などの楽曲が次々と演奏されました。開催に当たり、大久保明・伊仙町長がご挨拶され、慰霊塔の大改修が多くの方々の寄付により実現したことに深い謝意が示され、併せて、東シナ海を含む世界情勢が不穏さを増し、南西防衛の重要性がますます強く意識される時代にあって、恒久平和のシンボルである本慰霊塔を守り続け、自分たちの国は自分たちで守るのだという強い決意を示すためにも、本日の慰霊祭を挙行して参りますとの力強い言葉が述べられました。

引き続き、哀調を帯びた『ああ犬田布岬』の歌が流れる中、西犬田布婦人会に

よる鎮魂の舞が披露されました。本式典で長く受け継がれている、独特の奉納舞です。

慰霊祭は、参列者一同起立・拝礼、航空自衛隊南西音楽隊による「ラッパ君が代」が演奏される中、伊仙町職員の方々が国旗と軍艦旗を掲揚して、神事へと移ります。



伊仙町長（前列右から5人目）を中心に式典終了後の記念写真

地元神官の方々により、厳粛に修祓の儀、降神の儀及び祝詞奏上が執り行われたのち、大和艦隊戦没時刻の14時23分に、海に眠る3737柱の御霊に対し、参列者一同により黙祷が捧げられました。黙祷後に計画されていた戦闘機F15による慰霊飛行は、天候制限のため残念ながら中止となりました。

この後、大久保・伊仙町長と航空自衛隊第9航空団司令・鈴木繁直将補により、戦没者に対する哀悼の誠を捧げる慰霊の言葉が奉読され、玉串奉奠、電報披露、浦安の舞の奉納と続いたのち、昇神の儀へと移り神事が終了しました。

最後に、「ラッパ君が代」の演奏中、国旗と軍艦旗が降下され、一連の式典は厳かに幕を閉じました。

夕方からは、伊仙町役場近くの地域交流施設「ほーらい館」において「戦艦大和を旗艦とする戦没将士慰霊塔 修復記念交流会」が開かれ、現役自衛官、地元選出の国会議員、県会議員、町会議員や医療法人徳洲会の役員・会員一行及び地元関係者が多数参加して、活発な意見交換が行われ、改めて戦没者の御霊を偲び、慰霊塔の前で今後とも末永く慰霊祭を続けていくことを誓い合いました。



交流会の様子（地元の太鼓演奏披露）



桜の下の会場

この日は桜がまだ咲いており、花びらが沢山散っております。大和出撃の時も桜が咲いていたとの事。本日は当時の気候と同じではないか、桜が咲いていて良かったとそう思いました。朝降っていた雨がやみ、暑いくらいの陽ざしの中で行われた追悼式、落ちてきた花びら数えれば3000枚を優に超えていたでしょう。さながら在天の方々が舞い降りてきたように花びらが舞っている。追悼式でした。

建立されている場所でした。追悼式は、ご遺族・来賓・戦艦大和会会員等大勢の参加者が参列する中、大和会川西副会長の開会の辞・軍艦旗掲揚・黙祷と続き、主催者である大和会小笠原会長による「散華された乗組員の方々の鎮魂・慰霊・遺訓の継承を後世に引き継いで行くことが使命であり、この使命を果たすため毎年慰霊を行っている。天一号作戦で亡くなった方々等多くの散華された方々に限らない感謝と哀悼の誠を捧げその御霊の福を祈念する。」という心のこもった式辞と進み、来賓代表による追悼の辞・来賓紹介・参列者一同による献花奉納と粛々続き、軍艦旗降納・大和会花戸副会長による閉式の辞で無事追悼式は終了しました。

戦艦「大和」戦没七十九年追悼式に参列して

評議員 原島淳子

令和6年4月7日(日)、呉市上長迫町 長迫公園(旧呉海軍墓地)内「戦艦大和戦死者之碑」前において斎行された戦艦大和会主催による戦艦「大和」戦没七十九年追悼式に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

この慰霊祭の会場は、旧呉海軍墓地内ということもあり、周りには沢山の碑が

最後にこの句を捧げます。

咲け桜

海征く君に

見えるよに



「戦艦大和戦死者之碑」

万世特攻慰霊碑第53回慰霊祭に参列して
理事 福江 広明

1 慰霊祭の概要

令和6年4月14日(日)、「万世(ばんせい)特攻慰霊碑第53回慰霊祭」(以下「慰霊祭」)が、万世特攻慰霊碑奉賛会主催により、鹿児島県南さつま市加世田に建立(昭和47年5月)されている万世特攻碑「よろずよに」の前において、斎行された。



万世特攻慰霊碑

万世特攻基地は、日本三大砂丘の一つに数えられる吹上浜(ふきあげはま・薩摩半島西岸の砂丘海岸)に、昭和19年末、陸軍最後の特攻基地として建設された。基地内の万世飛行場からは、昭和20年3月から6月にかけて特別攻撃隊・振武隊、66及び55各戦隊等の計201名(17歳の少年飛行兵を含む)が、祖国防衛のために沖縄方面に出撃し散華されている。

今年の慰霊祭は、快晴下ではあったが強風の中、万世特攻平和祈念館に隣接する万世特攻慰霊碑前において、コロナ禍以前の様式・要領で10時半から式次第に沿って執り行われ、11時半には閉式となった。参列者は、全国各地から44名の遺族、旧隊員等8名をはじめ一般参列者及び万世特攻慰霊碑奉賛会関係者等、約200名であった。

慰霊祭の式次第は次のとおり。

- 1 開式のことば 奉賛会副会長
- 2 国旗掲揚
- 3 黙祷
- 4 追悼のことば 奉賛会会長
- 5 慰霊のことば 遺族代表
- 6 慰霊の詩 旧隊員
- 7 祭電披露
- 8 献詠
- 9 献花 参列者全員

- 10 献奏
 - 11 若者の誓い 若者代表
 - 12 合唱
 - 13 国旗降納
 - 14 閉式のことば 奉賛会副会長
- なお、海上自衛隊鹿屋航空基地所属の航空機による慰霊飛行は中止となったが、陸上自衛隊国分駐屯地の音楽隊による献奏等については実施された。



参列者による献花

2 「追悼のことば」

万世特攻慰霊碑奉賛会の本坊輝雄会長は、追悼のことばに先んじて能登半島地

震による犠牲者の冥福と被災地の早い復旧・復興を祈念された。またウクライナ侵攻及びアラブ諸国間の紛争が一刻も早く終息することを祈願するとともに、今日の我が国の平和と繁栄の礎が、万世飛行場から出撃した隊員の尊い犠牲により築かれたことを一時も忘れることはなく、恒久平和の実現に向け努力を続ける旨の追悼がなされた。

3 「慰霊のことは」

第433振武隊の一員として散華された三浦宏氏の姪にあたる藤崎雅子氏が遺族代表として述べられた。数年前に藤崎氏が父上の遺品を整理された際に、叔父・三浦宏氏による家族宛ての手紙を見つけ読んだところ、そこには当時の危機迫る状況や任務を全うしようとする覚悟の重さ等が書かれていたとのこと。この事をきっかけに、特攻の歴史や事実を知るため万世特攻平和祈念館を訪れて、特攻隊員の遺書を涙ながらに読んだという自らの経験が話された。その上で、あらためて平和な世の中の永続を願い、そのため努力を惜しまないとの誓いで結ばれた。

4 「慰霊の詩」

旧隊員代表は、昨年に引き続き元飛行第66戦隊（操縦）の上野辰熊氏（96歳）であった。同氏は、まず比島レイテ作戦、

菊水作戦等における転戦、激闘、戦力損耗の各状況から終戦に至るまでの所属部隊等の動向を分かりやすく説明された。続けて、戦時の青少年達が「至純の心」を持って如何にして国難に殉じたかを後世に伝えたいと願った故苗村七郎氏による「よろずよに」の慰霊碑の建立、郷土愛・家族愛に満ちた遺書等が展示された



旧隊員代表・上野辰熊氏

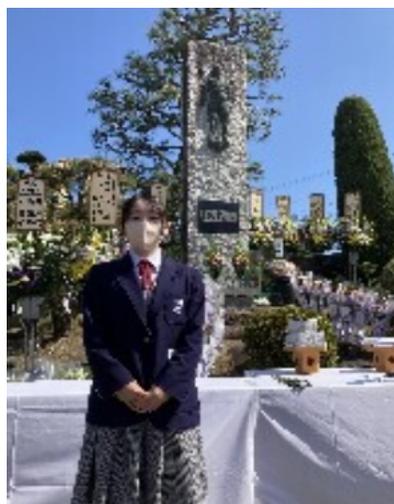
万世特攻平和祈念館の建立の経緯にも触れられた。結びには、「在天の英霊よ願わくば末永く この美しき故郷日本国を護らせ給え」と万感の思いを込め慰霊の詩を捧げられた。

5 「若者の誓い」

若者代表は、鹿児島県立加世田高等学校3年生の内之宮由奈さんであった。特攻隊員の心情を深く知ることの難しさを認めつつも、同年代の一人として、当時

彼らが置かれた厳しい立場や過酷な状況を、遺書を通じて学び、永きにわたり慰霊していかなければならないとする姿勢が、読み上げから伝わってきた。また現代において自らや同世代の若人が平和を享受していることへの感謝と共に、次なる世代へ戦争を起ささない、起させない意志を伝承していくべきことについての思いが込められていた。

特に、戦争の全面否定だけを主張する



若者代表・内之宮 由奈さん

のではなく、先の大戦において国家存続のために、わが身を賭した若者達の存在を忘れてはならないと強調された点が印象的であった。これに対して参列者から大きな拍手が送られた。

昨年、私は万世特攻慰霊祭にかかる会報記事において、『戦没者慰霊顕彰の先行き不安について警鐘を鳴らし続けるだ

けではなく、若い世代、とりわけ十代の児童に慰霊顕彰の行為を継承させるために、学校教育の中で我が国が過去関与した戦争・紛争に関する正しい史実を学ばせ、常識に基づく歴史観を育ませようとする教育行政が大切だ」と記述した。

昨年が続いての参列となった今年、特攻はもとより戦争を含む歴史観の育成は教育行政の義務であるべきとの思いを強くした。さらには、健全な戦争史観に関する教育が、特攻基地が存在した周辺地域のみならず、戦没者慰霊のためにも全国へ波及することを望むものである。こうした児童教育の変化の原動力に、これまで「若者の誓い」を朗読してきた地元の若者達がなっていくことを大いに期待したい。

なお、内之宮由奈さんによる「若者の誓い」の全文は次のとおりである。

『若者の誓い』

戦後79年、刻々と時が流れる中で戦争の悲惨な記憶も薄れてきました。79年前、この広大で美しい吹上浜と青松の広がる万世の地から201名にもものぼる多くの特攻隊員が沖繩に向けて出撃してきました。いった彼らはどんな思いで出撃していったのでしょうか。彼らの心の内を知るすべはもうありません。

しかし、同年代の私たちだからこそ、彼らがどんな気持ちだったのか、もし自分が彼らと同じ立場だったらと思いをはせることはできません。

私は先日、万世特攻平和祈念館に伺い、遺書を拝読しました。どの遺書からも国のために、愛する人のためという思いが溢れ、死ぬことに対する恐怖や弱音は一切ありませんでした。

彼らは、本当に強い気持ちだけを抱えて出撃していったのでしょうか。もつと家族と過ごしていたかった、愛する人と共に年老いるまで一緒にいたかった、友人と遊び語り会いたかった、もつと学びたかった、将来の夢を語りたかった、生きていきたかった……。そのような思いは、本当に抱かなかったのでしょうか。「戦争をするなんて愚かだ」「未来ある若者の命をなんだと思っているんだ、戦争なんて行かなくてもいいじゃないか」。当時の話を聞くたびに、平和な現代社会に生きる私は、そのようなことを考えます。しかし、当時の日本は、戦わなければ明日の命が約束されない状況におかれていたのです。今とは全く違う教育・環境下で自分の思いを堂々と語る、ましてや自分の保身のために国を捨てて逃げるようなことはできなかつたでしょう。たくさ

んの希望を胸に秘め、愛するものたちのために命を捧げた方々に、心から哀悼の意と敬愛の念を抱きます。そして、学びたいことを自由に学び、大いに夢を語る私達の日常をもつと大切にし、感謝しようと思いました。

現在、日本、世界では平和について深く考えなければならぬ時が来ています。自分たちの平和を守るためだけの行為が他の人たちの平和を脅かす行為になり、「平和」という言葉の矛盾が起きています。

現代に生きる人の多くは、戦争を経験していません。しかし、歴史を学んでいまず。今一度、歴史を学ぶ意義を考え、二度と戦争が起らないように次の世代に私達が戦争の悲惨さを語り継ぎ、平和を祈る心を次の世代に繋げていくことをここに誓います。

若者代表

鹿児島県立加世田高等学校 3年
内之宮 由奈



特攻碑の前に設けられた祭壇

第65回出水市特攻碑慰霊祭に参列して

評議員 及川 昌彦

令和六年四月十六日火曜十一時に開催された出水市特攻碑慰霊祭に岡部俊哉副理事長と参列しました。コロナ禍の影響でここ数年は前日に関係者で行われる市長主催の交流会は中止されており、ご遺族との交流が出来ないのが残念でした。今年是一般公開されて参列者は142名でした。戦友の参列は皆無となりご遺族の参列も六名でした。

そのため顕彰会から参列した2名(岡部副理事長・及川評議員)は来賓席でなく遺族・元隊員の席に案内されました。11時に陸上自衛隊国分駐屯地儀仗隊と出水市消防団の儀仗隊が国分駐屯地音楽隊の演奏で国旗及び軍艦旗掲揚が厳粛な中で行われ、開式後に黙とう、特攻碑への供花は市長、遺族代表、顕彰会岡部副理事長の順でその後、雲の墓標、鎮魂殉国英霊の碑、出撃の碑と続き、椎木伸一市長が慰霊のことばを出水市特攻碑顕彰会会長として述べられました。そして陸上自衛隊国分駐屯地儀仗隊による棒銃、音楽隊による「海ゆかば」の献奏、参列



遺族・元隊員席に案内された顕彰会参列者



参列者による献花

者全員による献花、慰霊電報の披露。音楽隊による記念演奏の曲目は「轟沈」「ラバウル海軍航空隊」「軍艦行進曲」「勇敢なる水兵」「誰か故郷を思わざる」最後に全員で「同期の桜」を合唱し、軍艦気降下で閉式となりました。鹿屋航空基地司令の牛若健吾海将補と清水義也鹿兒島水交会会長が参列されました。四月十六日は第七銀河隊の出撃日ですが乙種特別飛行予科練習生としてこの日に出击された田中仙太郎隊長のご遺族も参列されました。顕彰会として参列した時は遺族の方々の交流を深め慰霊と顕彰を引き継いでいきたいと思いました。

令和6年度国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭及び慰霊の集いに参列して

評議員 国分 雅宏

令和6年4月21日(日)、雨の降りしきる中、陸上自衛隊国分駐屯地正門前にある特攻碑公園内の顕彰碑「特攻機発進之地」前に設置された雨除けのテント内に約90名の参列者が集い、今年で61回目となる国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭が国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会の主催で挙行された。



慰霊碑前に設けられた祭壇

国分海軍航空隊は、昭和19年8月15日に開設、昭和20年から海軍特別攻撃隊の国分第一基地として使用され、面積三百ヘクタール、三千平方メートルの格納庫、三十三基の掩体壕を有していた。この地から427名もの若き勇士たちが祖国防衛の為に飛び立ち特攻を敢行、祖国の危急に殉じた。「特攻機発進之地」の慰霊碑は、第一基地跡地の国分駐屯地前に昭和39年8月15日に建立された。昭和52年7月には「特攻慰霊碑建立委員会」が結成され、昭和54年4月6日、国分第二基地があった鹿児島空港近傍の上床公園に(十三塚原海軍)「特攻の碑」が建立された。

本慰霊祭は、「国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会」(委員長 霧島市長 中重真一氏)の主催で毎年4月22日前後の日曜日午前に開催、合わせて同日の午後には溝辺において慰霊の集いを実施している。また、国分駐屯地の第12普通科連隊が駐車場の開放、昼食会場の提供、儀仗等、全面的に支援している。

雨は慰霊祭の準備が整う頃には小雨程度に回復し、11時に副委員長の新町副市長による開式の言葉が始まり、全参列者による拝礼、国旗掲揚、黙祷に続き、委員長の中重霧島市長及び仮屋霧島市議会

議長による慰霊のことは、国分基地発進特攻隊員戦没者遺族代表の出島廣和氏による追悼のことは、参列者による献花が行われた。次いで国分駐屯地儀仗隊による敬礼、第12普通科連隊音楽部による献奏が実施された。

最後に、後世に特攻隊の史実を語り継ぐ為、毎年参加している霧島市内の小中学生代表として、霧島市立国分南中学校の有村琉斗君による誓いのことが朗読された。国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭は、副委員長の溝辺遺族会会長 有村秀忠氏の閉式の言葉で11時55分に閉会となった。



霧島市内の中学校代表による誓いの言葉

慰霊祭終了後は、駐屯地正門から駐屯地厚生センターに隣接する会場に移動し、遺族の方々を囲んでの昼食懇談会が実施された。昼食会には、主催者の中重霧島市長をはじめ、村山国分駐屯地司令、牛若鹿屋航空基地司令、松浦自衛隊鹿児島地方協力本部長の自衛隊関係者及び霧島市役所関係者等が参加した。

その後、断続的な強雨の中、鹿児島空港の北西部に位置する溝辺の上床公園に移動して、国分基地特攻隊員戦没者慰霊の集いに参加した。

例年通りであれば、高台に設置された「特攻の碑」前での実施であったが、生憎の雨と霧のため、隣接する「コミュニティセンター」の2階に祭壇を設け、室内での開催となった。

本慰霊の集いの参加者は約70名であり、15時に予定通り開始された。

初めに保存委員会監事の溝辺自衛隊家族会会長 町田英司氏による開式の言葉、次いで参加者全員による国歌斉唱、黙禱に続き、委員長中重霧島市長による慰霊の言葉が述べられた。献花はご遺族、ご来賓、一般参加者、関係職員の順で実施され、献花後に霧島市立綾南中学校3年生 竹原瑞樹さんによる誓いのことばが朗読された。事後、参加者全員で同期の



霧島市内の中学校代表による誓いのことば

桜を合唱し、第12普通科連隊音楽部による演奏が披露され、副委員長の有村溝辺遺族会会長による閉式の言葉で15時56分に閉会となった。

今回初めて本慰霊祭に参加して、国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会（委員長 霧島市長 中重真一氏）が組織的に慰霊祭を運営するとともに、第12普通科連隊が支援する枠組みが確立されているとの印象を持った。特に、霧島市内の小中学生代表が慰霊祭に参列し、かつ中学生代表各1名が両会場で誓いのことばを朗読し

ていることは、後世に特攻隊の史実を語り継ぐという目的達成の礎となると感じた。

また、国分駐屯地内にある薩摩隼人記念館の特攻隊関連展示や、上床公園の溝辺コミュニティセンター内の第二国分基地（十三塚原）特攻資料展示は、ご遺族のみならず、一般の方々に特攻隊の史実を広報できる態勢が整っているとの感想をもった。

結びに霧島市内の中学校代表2名による「誓いのことば」を紹介する。（聞き取った儘）

（国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭）
誓いのことば

今日まで私は戦争や特攻について、過去の歴史、80年前に終わったこと、という考えが頭の隅にありました。しかし、今回、国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭に参加したことにより、昔のことではあります、向き合い続けなければならない現実であると学びました。

かつて日本では、国のためという思いから、特攻していた歴史があります。隊員たちは、どのような思いで、特攻へ行ったのでしょうか？今を生きる私達は、「つらかっただろう。」「残りたかっただろう。」「と考えるかもしれません。し

かし、戦時中に祖国のためならと教育を受けた未来ある若者は、2度と生まれ育つた地に帰ることができぬとわかっているも、特攻機に乗り込んだのではないでしようか？

国のため、そして何より大切な家族の安寧を願い、戦い、散っていった人々のおかげで、戦争は過去のこととなりました。以前私は特攻隊員の最後の手紙や実際の映像を見たことがあります。それはとても衝撃的で忘れがたい思い出となりました。世代は移り変わりますが、私達にできることは、記録や、このような式典を通して後世へと正しく伝えていくことです。

特攻隊員と、その遺族の方々への追悼の意を表し、世界の人々が笑顔で暮らせる世の中を作ることをここに誓います。

令和6年4月21日

国分南中学校生徒代表 有村 琉斗

(国分基地特攻隊員戦没者慰霊の集い)
誓いのことば

旧日本海軍航空隊、第2国分基地からは、私達と年齢がさほど変わらない、217名もの特攻隊員が、衷心な愛国心と使命感、そして家族のことを思い、特攻され戦死されたと聞いています。

私達中学生でも、特攻隊や戦争まで聞き、事実についてテレビやインターネット、資料を見れば、情報として想像することはできません。けれども戦争に巻き込まれた方々の悲惨な体験や悲しみ、苦しみは資料などからは感じることはできません。戦争を体験した世代の方々に残された時間は決して多くありません。だからこそ、1人でも多くの戦争体験者の声・

感情を次世代につなげ、体験としての戦争を風化させてはならないと、私は思います。今回、この国分基特攻隊員戦没者慰霊の集いに参列させていただいたことで、平和の尊さを改めて実感したとともに、戦争犠牲者のご遺族の思いを聞き、後世に伝え告ぐことが、残された私達の責務と感じます。

本日のこの貴重な経験を胸に、戦争の無い、世界中の人々が、平和で幸せな暮らしが出来るように努めていくことを誓います。

令和6年4月21日

綾南中学校 3年 竹原 瑞稀



上床公園にある「特攻の碑」
(令和5年8月14日に撮影)

沖繩県「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭

評議員 宮本 雅史

四月二十三日、沖繩県護国神社（那覇市奥武山町）で、「第六十六回春季例大祭」と『「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭』が営まれた。

この日の那覇地方は前日の猛暑とうつて変わり、午前中、雷雨に見舞われるなど、空模様が心配されたが、春季例大祭が始まる頃には晴れ間が広がり、例大祭は神社社殿で、特攻慰霊祭は、特攻勇士之像前で行われた。

沖繩県護国神社には先の大戦で亡くなった十七万七千九百余柱の軍人、軍属が合祀されているが、特攻作戦関係では、航空特攻隊員十一柱、水上特攻・震洋隊員五柱、特殊潜航艇・蛟龍隊員六柱の計二十二柱の沖繩県出身者が合祀されている。慰霊祭には、昭和十九年十二月十六日、第十一金剛隊の一員としてフィリピンで特攻を敢行、散華した我喜屋元次郎二飛曹の実弟、元四郎さんと沖繩県糸満市で戦車特攻を敢行した新里幸勇さんの姪、庄司マリ子さんから遺族二人が参列。地元住民ら約三十人と英霊への感謝と平和を誓った。

我喜屋二飛曹は、出撃前、故郷沖繩・

伊計島の上空を旋回、両親に別れの手紙を投下したことで知られる。「英霊にこたえる会」の令和六年版カレンダー「靖國」は、沖繩県護国神社を紹介、その中で我喜屋二飛曹を取り上げている。カレンダーにはこう書かれている。

（…）昭和十五年、十六歳になった元次郎命は、大阪に住む姉兄を頼って本土へ渡った。「父母に親孝行をしたい」との思いで島を離れたが、翌年十二月の対米開戦により海軍に志願。海軍丙種飛行予科練習生十六期となった。

特別攻撃隊に志願し、フィリピン島への出撃を命じられた元次郎命は、故郷をもう一度この目で見たいと思い、伊計島を通過して任地へ向かうことにした。

島の上空へ近づくと、エンジン音を聞きつけた人々が走り寄って来た。母も父も転がるように走っている。狂ったように叫んでいる。恐らく自分の名前を叫んでいるのだろう。上空を旋回して、前日したためた手紙を落とした。

「お父さん、お母さん、元気で楽しく暮らしてください。元次郎はお国のために行ってきます。親孝行できませんでしたが、許してください。泣かないでください。褒めてやってください。海の男です。海から海で死ねて本望です」

マバラカット基地到着の三日後、アメリカ軍の凄まじい攻撃の中、十三名の第十一金剛隊の一員として敵艦隊に突入した（…）

昭和十九年十二月十六日、フィリピン・スマトラフ島付近で戦死。十九歳だった。

以上



神官による神事



第33回秋田県特別攻撃隊招魂祭に参列して

中村 敏弘

令和6年4月29日(日)、「第33回秋田県特別攻撃隊招魂祭」が秋田市内に位置する総社神社にて秋田県特別攻撃隊慰霊実行委員会(委員長・柘谷政雄氏)主催で厳粛に執り行われました。今回、この招魂祭に参列する機会を得ましたので報告します。

来賓として拓殖大学防災教育研究センター長の濱口和久氏が列席されたほか、遺族関係者、県議会・市議会議員、民間有志など約50名の参列でした。

1 招魂祭の概要

当日は葉桜の緑あふれる晴天の中、東雲(しののめ)飛行場戦没者顕彰会の小野立氏(能代市議会議員)の司会による開式の辞で招魂祭は開始されました。なお、この招魂祭は「昭和の日記念祭式」も兼ねており、まず初めに昭和天皇武蔵野御陵へ参加者全員で遥拝しました。その後、国歌演奏、黙祷・ラッパ「国の鎮め」吹奏、神事、修祓・降神・献饌、祭詞奏上・神前神楽奉納と続きました。

続いて、司会の小野氏が、秋田県陸海軍特別攻撃隊五十六柱全てのご芳名を朗読、元土浦海軍航空隊で夜間戦闘機「月光」搭乗員だった藤本光男氏(代読 伊藤見一氏)による追悼文朗読、総社神社青年会の渡部顕氏による大西中将遺書朗読と続きました。斎主・玉串拝礼が執り行われた後、玉串拝礼となり、私も特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して玉串拝礼させて頂きました。

撒饌、昇神で神事

神前神楽奉納



終了の後は、秋田県特攻英霊「海軍少尉桑野正昭」のご遺書が秋田県議会議員の武内伸文氏により朗読され、そののち「秋田県民歌」を秋田県議会議員の宇佐美康人氏の声に合わせて、全員で奉唱しました。

吟詠「靖国の宮」が日本詩吟学院岳風会の斎藤法生氏により歌われた後、主催者を代表して柘谷実行委員長からご挨拶ののち、全員で聖寿万歳及び「海ゆかば」を合唱して終了しました。

なお、招魂祭後は総社神社の社務所内会館に場を移し、拓殖大学防災教育研究センター長の濱口和久氏による記念講演「英霊達に託された日本!」―戦中、戦後、そして未来へ―が行われました。

2 所見等

(1) この招魂祭は、秋田県議会議員及び市議会議員の参加は見られたものあくまで有志での参加であり、自治体が関与しない慰霊祭(招魂祭)として毎年この時期に実施されている慰霊行事です。他方、実行委員長のご尊父である故柘谷健夫氏の意志を受け継いだ心ある方々が中心となつて三十年以上にわたり、しっかりと慰霊行事が行われていることに感銘を受けました。

(注) 柘谷健夫氏は、昭和十九年四月十九歳の時に海軍工作学校沼津校に志願入隊、昭和二十年三月卒業後、長崎県大村湾川棚基地に編成された第三特攻戦隊川棚突撃隊に配属、その後、終戦。

(2) 慰霊之碑を前に参加者全員で秋田県民歌を「♪秀麗無比なる鳥海山よ…」と声高らかに英霊に届けとばかりに奉唱した際には感極まるものがあり、このほかにも吟詠「靖国の宮」の披露など、非常に工夫された行事内容となっていると感じた。

なお、「秋田県民歌」は日本最古の県民歌であり、先の大戦前の昭和五年教育勅語四十周年を記念して秋田県が歌詞を公募して作られた歌であり、当

時の秋田県出身の特攻隊員は全員が歌っていた歌であるとのことです。

(3) この招魂祭の形式・内容等について柘谷実行委員長に伺ったところ、

「三十三年の間に様々な出会いとご縁からこの様な形で継続してきたが、実行委員会の中では『これからはこれまでの参加形態からより多くの一般の方々からも慰霊祭へ参画して頂こう』と話しているとのこと。例えば今回の詩吟

のような形や空手等の演武、その他、一般の方の奉納演奏、奉納歌等、出来る範囲で現代の神楽とも思しきものが英霊も喜ばれるのでは?と考えています。今回は、戦前から歌われている全三国三大県民歌(長野県民歌、山形県民歌と並ぶ秋田県民歌)を若い県議会議員が歌ってくれましたが、参列者や神職の方々も歌って下さり、秋田県出身の英霊も生前歌っていたので戦前と令和が繋がりに、結果的に良い試みだったと思います」とのことであった。

(4) 国内の慰霊行事全てにおいて言えることではあるが、ここ秋田県も例外ではなく、関係者の高齢化が進んでいると感じた。今後ともこの慰霊祭(招魂祭)が後世に伝えることができるよう何らかの支援ができればと考えつつ、

帰京の途につきました。

以下、ご本人の了承を得られたので掲載します。

3 実行委員長の挨拶(一部省略)

或る有名な沖繩出身の映画監督が、この招魂祭にも何度も参列したジャーリストの上島嘉郎氏と昨年、対談した際に明かした終戦前の秘話を皆様へもお伝えしたいと思います。

戦後、沖繩の民謡歌手となった少年が当時、忘れられない特攻機の想い出をずっと心にとめていた話でした。

その少年は沖繩特攻へ向かう飛行機を読谷のお墓の影に隠れて毎日観ていました。しかしある時、墓を飛び出して一緒に走り出し、走って「頑張れよ!」と手を振ったら、突っ込む直前の特攻兵士が窓を開けて手を振ったとの話を明かしてくれました。特攻パイロットは、その沖繩の少年に応えたかったようでした。

「殊更本土と沖繩の離反を計るような、そういう立場の方々の間違ひなくいて、そういう方々は 実は絆があつたのだと云う、そういう部分の事実は目もくれな。戦争だから悲惨なこと、残酷な事はあるだろうけど、それだけじゃない。そういう過酷な状況の中で本当に信義を全うしようとか誠実に振舞った人々が軍人

文民間わずいたはずで、そういう人達の存在を無かった事にしてはいけない、それを無かったことにして描く反戦平和と云うのは一つの真実しか認められないという態度であって、それはおかしい。」との対談でした。

少年に手を振ったパイロットもこの目の前の慰霊碑に刻まれている方々も出撃前、先程の遺書のように愛する者の為に戦う為、多くの大切な人々との別れと向きあつた事でしょう。

追悼の言葉を書いてくださいました藤本光男様からも直接伺つた話もお伝えします。

「ある特攻部隊で夜に一人の兵士が静かにハーモニカで故郷を奏でたところ、一人二人と歌いだし、何時の間にか最後は皆で涙の大合唱になつてしまつていた。」とお話しました。

「兵士たちの夢の帰る場所 故郷 夢の帰っていく場所 故郷」

「兵士たちの夢は何時も帰つていった故郷の村へ」

「兵士たちに未だ帰る場所があるのか？」

先程の沖繩の少年も一機の特攻機を走りながら追いかけていった頃を思い出しながら、その様に想いを馳せる事があるそうでした。

マッカーサーとの会見の後、昭和天皇は日本の再建には百年の時は掛かるであろうと語っていたそうです。

今年の特攻作戦が始まり、八十年になります。

先人たちが「この国の為に戦つて本当に良かった！」と思えるような日本であり、日本人でありたいとのこの招魂祭に参列される方々の切なる想いも近年の日本の現実を見て、今では儂い夢になつてしまつたのかもしれない時に私も思う事もありました。そんな時に懐かしい、ある先人の言葉と再会する機会を得ました。

夢なき者に理想なし

理想なき者に計画なし

計画なき者に実行なし

実行なき者に成功なし

故に夢なき者に成功なし

吉田松陰

二年程前に当神社宮司が若き日に奉職した山口県赤間神宮をご紹介頂き参拝した時に、更に足を延ばし訪ねた同じ山口県萩市の松陰神社で、この招魂祭を始めた、亡き父も時に語っていた明治維新黎明期に倒れた、偉人の言葉を久々に目にしました。

図らずも、松下村塾の地に誘われ、令

和の現在、地方からでも英霊達を大切に祀り、拙くても、小さくても、伝えていく事が、之までの戦後とは逆のベクトルで、本来の日本人のアイデンティティーと自国の歴史と誇りを取り戻し、更に本当の日本の主権回復の小さな一助となつていくのが父の生前最後の夢ではなかったのか？との強い思いを新たにいたしました。

来年は終戦八十年を迎えますが、改めて先人たちの想いと現在、未来を繋ぐ大切な招魂祭としての在り方を此れからも深く考え実現していこうと思ひます。

本日は三十三年前に、この慰霊碑の題字の揮毫を父が是非にとお願いしました。今は亡き元海軍参謀、富士信夫氏に若き日に薫陶を受け、現在は日本内外の様々な危機管理スペシャリストとして広く知られる濱口和久先生に海外も瞳目した濱口先生の故郷熊本の特攻英霊に加え、戦後、毅然として生きた日本人の家族の物語をこれから記念講演して頂く予定になっています。

最後になりましたが、皆様におかれましては、本日もお忙しい中、誠に、ご参列ありがとうございます。

令和六年四月二十九日

秋田特攻慰霊実行委員長 舛谷政雄

4 藤本光男氏の追悼文

あれから八十三年になる。

あの戦争からである。東京そして都市の大部分が焦土と化し、人類はじめての原子爆弾が投下され、まさに国家存亡の危機に瀕したときからである。

あの戦争を帝国議会は大東亜戦争と議決した。昭和天皇の開戦の詔のとおり、この戦争がアジア安定と自国の平和と繁栄を願う自存自衛の聖なる戦いであることを明らかにし、開戦のやむなきにいたった日本側の正しい歴史観が込められていた。

昭和二十年八月十五日、終戦。その昭和二十年十二月、モスクワに集った米国、英国、ソ連の三ヶ国会議でドイツのナチス同様、日本の戦争指導者らを東京裁判にかけて処断することを決め、マッカーサーが最高指揮権を掌握し裁判を総括することになった。

そして戦勝国は日本を一方的に裁き、東條英機元首相ら七人を「A級戦犯」とし、絞首刑とした。さらに東京裁判と並行してマニラ、シンガポール、ラバウルなどのアジア各地で「BC級戦犯」の裁判が開かれ、約五、六〇〇人が逮捕投獄され、最終的に日本人一、〇六一人が戦犯として処刑されたのである。

この法なき裁判が単なる恨みや復讐によつて行われたにすぎないことを示す証拠がある。それは東京裁判において東條英機元首相以下七名が起訴されたのは昭和二十一年四月二十九日、すなわち昭和天皇の誕生日、さらに戦犯が絞首刑になったのは昭和二十三年十二月二十三日、当時の皇太子殿下の誕生日なのである。

今、私の手許に一冊の本がある。二度読んだ。著者 濱口和久氏。「祖国を誇りに思う心」である。帯に「目覚めよ日本人」とある。この一冊をご英霊に捧げ追悼の言葉としたい。

歴史をなぞれば日本が日露戦争において勝利し、満州の権益を手にしたときから日本と米国の戦争はカウントダウンが始まっていたといえる。

つまり中国に権益を求める米国の野望と日本の安全保障上シナ大陸への外国の進出を拒む日本とはぶつかり合う存在だったのである。

そして米国が日本への石油等資源の輸出禁止を各国に呼び掛けたABC包囲網。ハル・ノートの最後通牒により日本は戦争へと追い込まれていったのである。日本が米国と戦争して勝てないことは日本の指導者はじめ国民は分かっていたはずだ。

戦争回避の方策はあったかも知れない。しかし、先人達が考えたことは、明治維新以来、日本が主張してきた「国家理念、意地、誇り、正義」を守り抜くことだった。

戦場において降伏せず最後の一兵まで戦い玉砕した。そして神風特別攻撃隊は我々へそれを伝えるための戦いであり、メッセージだったのである。

私たちのため命を懸けてくれた多くの先人達を無駄死にしてはならない。彼らの精神を受け継ぎ、東京裁判史観を払拭し、大東亜戦争の意義を子孫に伝えることが現代に生きる日本人の使命なのである。

その使命に燃えた人が故榊谷建夫様であり、その後を継がれた榊谷政雄様であります。

特別攻撃隊招魂祭にあたり、この一文を忠勇五十六柱に捧げ、追悼の言葉とさせていただきます。

令和六年四月二十九日

藤本光男

5 秋田県特攻英霊「海軍少尉桑野正昭」のご遺書

【海軍少尉 桑野正昭（十九歳）】

秋田県大曲市 昭和二年二月二十三日 生まれ

昭和二十年五月十一日戦死

神風特別攻撃隊菊水雷桜隊員(総員三十名)として沖繩周辺海上の敵艦船群に必死必中の体当たり攻撃を敢行。
機種「天山」

遺筆 両親への手紙 また生まれ変わって、母をたづねて行きます

拝啓、暫くぶりにて、便り致いたしませぬ。此前、一寸無事帰って来た事を(注・戦場より無事帰ったの意)通知致しましたが、あんまりあつさり致し居りましたので、今日、暇を見て新しく書き直します。又、今日出て行くので(注・又今日出撃する)時間がないので乱文にて失礼致します。寒い寒い北国の冬も過ぎ去り、春になってほかぼかとした暖かい毎日が続いて居る事と存じます。こちらはもう、桜も散り果はてましたが、家の方は、今さかりと咲いている事と想います。家の皆様も、さぞかし元気な事と思いますがどうか。小さい子供なんか元気ですか。こうやって書いて居ると、今にも皆みなが飛びついて来そうな気が致します。姉さん方も皆元気でしょう。兄様方より便りありますか。さぞかし戦地で、難ぎ致して居られることで御座いましょう。みんなが

元気な事は何よりです。寿夫も今頃は、軍隊生活に入って張切って居る事で御座いませう。軍隊に入れば、見違えるほど丈夫になりますから安心です。父、母上にも、御心配なさらないように、今や日本帝国もいよいよ危険が迫りましたが、我々搭乗員は打って一丸となり、敵撃滅に向かいますから、あまり心配しないで下さい。今まで十九年間、色々有難う御座いました。又、生まれ変わって母をたづねて行きますから、私が死んだからと云って、あまりがっかりしないで下さい。これも何か前世の約束事でしょう。死んだら第一番に、家をたづねるつもりです。三途の河で何年でも待つて居りますから、家の人が来た時は、大いに歓迎するつもりです。色々と、くだらな幸福い事ばかりかきましたが、父、母上のと健康とを祈って止みません。

総社神社宮司、後方右から枡谷氏、濱口氏及び筆者



では元気で
海軍一等飛行兵曹 桑野正昭父母上様

第70回知覧特攻基地戦没者慰霊祭

編集長 金子敬志

令和6年5月3日、鹿児島県南九州市に置いて斎行された「第70回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」に参列させて頂きましたので報告します。

一 概要

慰霊祭は、南九州市知覧町郡にある「知覧特攻平和観音堂」前で行われました。主催者は「知覧特攻慰霊顕彰会（会長 塗木弘幸南九州市市長）」です。斎行日は毎年5月3日と固定されています。慰霊祭は13時から開始されました。式次第は次の通りです。

- 1 開式の言葉
- 2 献茶
- 3 一同礼
- 4 黙祷（僧侶出仕）
- 5 読経・焼香
- 6 追悼のことば
- 7 慰霊のことば
（知覧特攻慰霊顕彰会会長
南九州市議会議長
鹿児島県議会議長
特攻隊員遺族代表
偕行会代表
- 8 献吟



参列者による献花

- 9 慰霊電報披露
 - 10 献花
 - 11 献奏
 - 12 南九州市長あいさつ
 - 13 慰霊演奏
 - 14 閉式のことば
 - 15 一同礼
- 以上のような式次第で慰霊祭は滞りなく進行し、約2時間後の15時頃に終了となりました。

一一 所見

私は平成25年、当時の水町博勝理事とご一緒に参列させて頂きました。

その当時と比べると、参列者は、当時の約1000名から今回は699名、そのうちご遺族は199名とやや減少していますが、私が参列させて頂いた特攻隊関連の慰霊祭では最大のものと思います。

ご遺族については、各地の慰霊祭と同様に高齢化が目立ちますが、ご遺族のご家族がご一緒に参列しておられるのが目立ちました。その中にはお子さまだけではなくお孫さんと思われる方もおられました。

本慰霊祭は、市長が奉賛会会長をされており、市職員の他に地元のパランティアも多数参加しているようで、地元根付いている事が感じられ、今後とも継続されると確信しました。

当日は、早めに会場に到着、開始までの時間を利用して、会場隣の「知覧特攻平和会館」を見学しました。

前回に訪れた際よりも館内は混雑していましたが、特に感じたのは外国人の見学者が多いことです。それに合わせて館内の説明にも英文が加えられており、これを機会に海外の方々にも特攻についての理解が進むことを願いました。

第12回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭

理事長 岩崎 茂

本年、5月11日(土)、福岡市中央区に所在する福岡縣護國神社で「特攻勇士之像慰霊祭」が執り行われました。特攻隊戦没者慰霊顕彰会(以下、「特攻隊顕彰会」)を代表し、私が参加して参りました。当該護國神社には、福岡県出身の301名の特攻隊員が祀られている。

昨年の福岡縣護國神社での「特攻勇士之像慰霊祭」は、コロナが五類になった直後であったにも拘らず、多くの方々のご参加されており、私は、驚きを持ちながら参加させてもらった。今年は、昨年の参加者数を更に上回る盛大な慰霊祭であった。ご参列されておられたのは、ご遺族をはじめ隊友会、郷友連盟、偕行社、水交会、つばさ会、防衛協会の方々、そして、特攻隊顕彰会の会員等々で総勢約200名であった。

顕彰祭第一部は、「祭典の部」で、田村豊彦宮司の下、黙祷から開始され、厳粛な神事が執り行われた。顕彰祭第二部は、「式典の部」となり、福岡県出身の特攻隊員麻生撰郎大尉の御尊父に宛てた遺書が朗読され、ピアノ曲「月光」が生演奏で奉納された。その後、陸上自衛隊

第四師団音楽隊が「空の神兵」、「出征兵士を送る歌」そして中島みゆきさんの「糸」等々を10曲ほど演奏してくれた。そして最後に、トランペットによる「同期の桜」、「海ゆかば」が吹奏され終了となった。大変素晴らしい企画であった。

このように、大変多くの方々にご参列頂いているのは、祭主である塚田征二会長の特攻隊に寄せる熱い思いと卓越したリーダーシップのお陰であり、そして塚田会長を支える強力なスタッフが揃って

いることであると強く感じた。そしてまた、不断から各種関係団体等との連携強化に努めていることからこそ、このような盛大な慰霊祭を執り行うことが出来るのである。学ぶべきことが多々あった。戦後、かなりの時間が経過し、各地での慰霊祭への参加者が減りつつある現状に鑑み、我々「特攻隊顕彰会」として、今後とも御英霊の御遺志を後世に語り継ぐため、まだまだ努力すべきことがある事を再認識した次第である。



福岡県特攻勇士之像

第58回特攻殉国の碑慰霊祭に参加して

評議員 原 知崇

五月十二日、長崎県長崎県東彼杵（ひがしそのぎ）郡川棚（かわたな）町新谷郷（しんがえごう）で執り行われた「第58回特攻殉国の碑慰霊祭」に岩崎理事長の代理として参列して参りましたのでご報告いたします。

川棚町は入り組んだ大村湾の中の小串浦に面した海沿いの土地で、佐世保からの鐵路が早くから敷かれ、沿線には海軍関係の施設が多い場所です。川棚町には大正七年に魚雷発射試験場が置かれ、佐世保海軍工廠で製造された魚雷の試験、調整が行われていました。大東亜戦争中になると、佐世保海軍工廠の分工場（のちに川棚海軍工廠）が設置され航空機用魚雷、潜水艦用魚雷の製造を行っていました。さらに昭和十九年には水雷学校川棚分校（のちに川棚臨時魚雷艇訓練所）が開所され、ここに「震洋」搭乗員と「伏龍」要員の養成所の役割を担っていきます。特攻兵器「震洋」は艇首内に二五〇キロの爆装をした高速ボートで、夜陰に乗じて敵上陸部隊の艦船を襲撃するもの。予備学生出身者、予科練出身者など、航空要員だった方が充てられていました。約6200艇が製造され、実際に

フィリピン、沖縄方面で出撃をし、本土決戦に備え国内でも展開しました。俗に人間機雷とも言われた「伏龍」は潜水服を着用した兵員が棒付き機雷を持ち、海岸から入水し海底を徒歩機動で進み接敵、敵の上陸用舟艇の船底を爆破させる兵器で、こちらも主に予科練出身者が充てられました。※ただし、伏龍隊員は実戦は経験せず、訓練中に多数の殉職者と、土浦海軍航空隊において空襲による戦死者を出しています。

その臨時魚雷艇訓練所の跡地に昭和42年の海軍記念日、元隊員らによる「特攻



特攻殉国の碑

殉国の碑保存会」によって建立されたのが「特攻殉国の碑」です。碑の前には波穏やかな震洋の訓練海域が広がり、また敷地内には資料館（見学は要連絡）、特攻隊顕彰会も参加したクラウドファンディングを活用して制作された震洋の原寸大模型が収められている展示館（ガラス窓から常時見学可能）があり、この地の戦争の記憶を伝えていきます。

例年この碑前で慰霊祭が開催されていますが、今回は豪雨のため、初めて近傍の公民館で開催されたとのことでした。慰霊祭は高齢化のため、現在は新谷郷の総代が主宰と代わり、地域主体で運営、斎行されています。



かつて震洋の訓練が行われた海域



公民館内に設けられた祭壇

参列者はご遺族、地元の方をはじめ、地元の自衛隊部隊長、自衛隊OB、水交役員など。祭壇には軍艦旗、国旗とともに海軍信号旗の「短艇」「航空」が掲げられていました。慰霊祭は軍艦旗に対する敬礼、国歌斉唱から始まり、百名あまりの参列者が若き殉国の御霊に黙祷を捧げました。

ご挨拶の中で、川棚町長は「国家の危機を救うため、我が身を顧みず、愛する家族を案じながら戦場に散華された隊員

に敬意と感謝を捧げたい」こと、また「碑と関連施設の保存と慰霊」のどちらが必要であること。資料館には現在、遺品が少ないので、ご遺族の方が今後遺品の保持が難しいようであればご寄付をいただきたいと訴えかけておられました。ご挨拶ののち、拝礼として白菊を一人一人献花し、同期の桜を斉唱して慰霊祭は終了しました。

碑に名前が刻まれている隊員は三千五百十一名。この地で篤く碑を守り、慰霊を続けていかれる地元の皆様に敬意を表します。



「震洋」展示館

令和六年五月二十五日、茨城県笠間市の筑波海軍航空隊記念館において、筑波海軍航空隊記念館友の会（筑波会）主催による筑波海軍航空隊慰霊の集いに参列して参りました。

令和六年筑波海軍航空隊慰霊の集い
評議員 原 知崇

筑波海軍航空隊は昭和九年、霞ヶ浦海軍航空隊友部分遣隊として開隊されてより搭乗員教育に従事、その後筑波海軍航空隊として独立し、大東亜戦争中の昭和十九年十一月からは邀撃戦闘機隊を編成、翌二十年三月からは神風特別攻撃隊筑波隊を編成、天一号作戦、菊水作戦に従事し五十五名が突入、戦死されています。

集いは晴天の下、百名ほどが参列されて「筑波海軍航空隊ここにありき」の碑前で斎行されました。

かつての筑波空飛行隊長のご息女でもある友の会松井方子会長のご挨拶による慰霊の集いは筑波空の元隊員らが創設した「友の会」の発足とともに平成十一年より始まり、その後歳月を経て今では参列者も戦争を知らない人がほとんど。しかし次世代を担う人々がこの集いを継承してくれるのは大変ありがたいことで、今後も一人でも多くの方がこの地を訪れ、筑波海軍航空隊記念館を見学し、戦争と

平和について考えてもらいたいと述べられました。

続いて笠間市長が大東亜戦争終結七十九年に際して、友の会、遺族、記念館スタッフをはじめとした多くの方の協力で慰霊の集いが開催されているが、この催しが千年先も続けていくことが戦歿された方へ尽くす哀悼の誠であるとして挨拶されました。

ご挨拶の後、勝田駐屯地音楽隊の「海ゆかば」奉奏の中、献花が行われ、参列



「筑波海軍航空隊ここにありき」の碑

者はそれぞれ一輪の白菊を手向けました。勝田駐屯地音楽隊は徽章を見ると職域が施設科であるようなので、音楽科による編成ではなく課外活動としての音楽隊のようですが、例年この慰霊の集いで炎暑の中演奏を行われ、演奏には高い評価を得ています。松井会長によると、会の精神的支柱として活躍され、昨年九月に百



献花する参列者

一歳で亡くなられた十四期予備学生出身の柳井和臣さんもことのほか勝田駐屯地音楽隊の演奏を楽しみにされていたとい

います。

柳井さんは大学在学中の昭和十八年に予備学生採用後、搭乗員教育を経て筑波空に配属、二十年二月に志願により特別攻撃隊に編成され、同年五月に鹿屋基地において特攻作戦に従事、敵艦を発見出来ず帰投し待命中に終戦、戦後は戦友の名誉のため、強い使命感をもって慰霊祭への参列や講演活動をされ、慰霊の集いの中心を担っておられ(参考・茨城新聞令和五年十月十六日号)たとのこと、当日も参列の若い世代の方から柳井さんについての思い出を伺いました。

大東亜戦争を体験した方々が高齢化し、これから戦争体験をどう伝えていくのかというのは多くの地域、団体が考えなければならぬタイミングにきています。そうした中であって、世代間の交流が絆となつている筑波海軍航空隊慰霊の集いは、慰霊の継承と、併せて記念館での戦争体験の修習という二つのテーマを今まさに進めていると感じられました。

千葉県特攻勇士之像慰霊祭

編集長

金子 敬志

1 慰霊祭の概要

令和6年5月26日(日) 11時より、千葉県護國神社において斎行された「千葉県特攻勇士之像慰霊祭」に当頭彰会を代表して参列させて頂きましたので報告します。

本慰霊祭は「千葉県特攻勇士之像」が建立奉納された平成23年5月26日の日に合わせて、毎年5月26日に千葉県護國神



社境内の「千葉県特攻勇士之像」前で執り行われているものです。式次第は次のとおりです。

- ① 修祓
 - ② 降神之儀
 - ③ 献饌
 - ④ 祝詞奏上
 - ⑤ 玉串奉奠
 - ⑥ 撤饌
 - ⑦ 昇神之儀
- 玉串奉奠の際には頭彰会代表として奉奠させて頂きました。
- 式典終了後、竹中宮司よりの御礼のお言葉とお話を伺ったのち 記念撮影を行って解散となりました。



2 所見

今回の慰霊祭は令和4年に千葉県護國神社がこの地に遷座してからは3回目、

建立時からは14回目になるものです。本慰霊祭は千葉県護國神社の主催になるもので、参列者がいなくても斎行すると言う神社側の強い思いによるものでもあります。そのため御案内状は送付されませんが、事前の申し込みが無くとも参列可能ですので、多数の方のご参列をお願い致します。

毎年5月26日11時より斎行され、式典の時間は約30分です。



三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者等
慰霊祭

評議員 中村 敏弘

令和6年5月26日(日)、第57回三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者・三重海軍航空隊戦没者「若桜の碑」慰霊祭及び第十二期甲種行予科練習生戦没者「海ゆかばの碑」慰霊祭が三重県津市の香良洲(からす)神社主催で厳粛に執り行われました。今回、この慰霊祭に参列する機会を得ましたので報告します。

三重航空隊は1942年(昭和17年)8月、海軍飛行予科練習生(予科練)教育隊として創設され、終戦までの3年間に約3万8千人が入隊し、最盛期には約1万5千人が航空機搭乗員としての基礎訓練を受けました。なお、三重航空隊の初代副長高橋俊策中佐は、軍歌「月月火水木金金」の作詞者としても知られています。

1 慰霊祭の概要

慰霊祭当日は、朝から降っていた小雨も止み、時折晴れ間が広がる清々しい気候の中、最初に第57回三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者・三重海軍航空隊戦没者「若桜の碑」慰霊祭が香良洲歴史資料館に隣接する若桜の碑霊園にて行われました。



「若桜の碑」慰霊祭の様子

慰霊行事等に深い理解を示されている森市議会議員(松阪市)による司会のもと、慰霊祭は開祭、初めに、自衛艦旗が高々と掲揚されました。この自衛艦旗は、海上自衛隊試験艦「あすか」の乗員が募金して三重県隊友会に寄贈された旗とのことです。

代理として代読させて頂きました。その後、後援会代表(三重県隊友会会長三石氏)挨拶及び主催者代表(氏子総代福島氏)挨拶と続き、最後は全員で「三重海軍航空隊」の隊歌を奉唱して終了となりました。

「三重海軍航空隊隊歌」
雲出の川瀬月染みて 太平洋の波よす
神風伊勢の香良洲浜世紀の空を翔けるべく
雄叫びあぐる高らかに 吾等は空の少年兵



御挨拶をされる三重県隊友会会長三石氏

海ゆかばの碑



この慰霊祭終了後、1キロほど離れた場所にある第十二期甲種行予科練習生戦没者「海ゆかばの碑」前にて今回初めて慰霊祭が行われました。祭りの流れは「若桜の碑」における祭事とほぼ同様でありました。

戦後、三重海軍航空隊の各期は、三重海軍航空隊が戦前所在した香良洲の地に同期毎に慰霊碑を建立し慰霊行事を行っていたそうです。その後、香良洲歴史資料館横に「若桜の碑」が建立されたこともあり、各慰霊碑は「若桜の碑」霊園へ移設されていったそうですが、やや離れた地に建立されていた第十二期甲種飛行予科練習生戦没者の「海ゆかばの碑」だ

けは何故かそのまま残され、今日に至ったとのことでした。「海ゆかばの碑」慰霊祭は毎年6月13日に催行していたそうです。

これまで戦没者慰霊祭が第十二期甲種行予科練習生を含めないで実施されてきたことに疑問を持たれていた三重県隊友会会長のご英断により、今年から「海ゆかばの碑」でも慰霊祭が行われることになったとのことであり、来年以降も二か所で同日実施されるものと思います。

2 所見等

国内の慰霊行事全てにおいて言えることではありますが、ここ三重県も例外ではなく、昨年に引き続き今年も三重海軍

航空隊隊員の参列を得ることとはなく、関係者の高齢化が進んでいました。他方、三重県隊友会会長の挨拶の中で、慰霊顕彰を自分たちが若い人達に伝えていくことが使命であること、先人の思いを途絶えさせることなく必ず拡げていく旨の発言があったことは素直に感動し、我々、特攻隊戦没者慰霊顕彰会としても同様の思いを忘れてはならないと

感じました。

そのような中、慰霊祭に参加していた中央大学の2人の学生と会う機会を得ました。ジャーナリズムを専攻しており、「特攻と中央大学」というテーマで調査を兼ねて参加していたとのこと。「来年は戦後80年。戦争を知る人が減る中、貴重な話を聞くことができた」「香良洲には今、住宅も多く立ち並ぶ。実際に来て分かった。」との感想から、若い世代に慰霊顕彰の意義が少しでも拡がっていくことを願わずにはおれない、予感させる嬉しい出会いとなりました。

また、これまで報道で取り上げられることのなかった今回の慰霊祭を地元紙(中日新聞)が取材し、後日、記事となったことも今後続く機会になったものと思えます。取材した記者は、慰霊祭の有りを理解するとともに、それ以上にこの大学生の若い一人から大きな刺激をもらったとのことでした。

3 最後に

三重県隊友会では、英霊に対する感謝の念を込めて毎月第三土曜日に慰霊碑清掃活動を欠かさず実施されていることを明記させて頂きます。

義烈空挺隊 出撃79周年慰霊祭

評議員 倉形 桃代

令和6年5月26日(日)午前10時より、陸上自衛隊健軍駐屯地(熊本県熊本市)内にある慰霊碑前において、全日本空挺同志会熊本県支部(支部長・松尾辰蔵氏)主催の「義烈空挺隊出撃79周年慰霊祭」が行われた。当日は心配されていた雨も降らず、時折涼風が吹く爽やかな天気になった。

参列者は青木伸一第8師団長・高倉敬第一空挺団副団長はじめ、第一空挺団の代表の方々・予備員の方々・関係者総勢70名の参列があった。特筆すべきは、



義烈空挺隊 慰霊碑

今年初めて熊本県出身の義烈空挺隊員のご遺族2組が揃って参列されたことで、地元熊本県民テレビの方が取材に来ていた。その様子は、地元のテレビ局で放映された。

慰霊碑周辺は、いつものように隊員の方々の手によって清々しく整備され、碑は白い落下傘と色とりどりの花々に囲まれていた。

式典は、松尾支部長の開式の辞に始まり、2名の隊員による献灯、西部方面音楽隊の演奏に合わせて国歌斉唱・黙祷、熊本偕行会・中垣秀夫会長による慰霊の詞、お供物・御香料等の紹介、その後参列者全員の献花、追悼電報の披露、最後に「空の神兵」を全員で合唱、献灯の消灯、閉式の辞を以て、式は滞りなく終わった。

今回のご遺族参列のきっかけは、地元の「菊池(花房)飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」が運営する「菊池飛行場ミュージアム」(菊池市泗水町)の館長・永田 昭氏が、別々にミュージアムを訪れたご遺族をこの場所で引き合わせたいとの思いから実現した。二家族は、知覧の慰霊祭には参列されていたが、お互いの面識はなかったとのこと。永田氏は、義烈空挺隊の慰霊祭にもっと多くのご遺族が参列できたらと、今も調査を続

けている。

稲津 勝曹長(母方の叔父)のご遺族・吉野キヨミさん(86)と、宮本忠一伍長(祖父の弟)のご遺族・宮本恵里さん(41)は、年は離れていても想いを馳せることは一緒。出身も年齢も同じなので、もしかしたら友人だったかもしれないと、お互いの写真や、ご家族の間で語り継がれてきたエピソードを語り合ったそう。同行されたお孫さん達のお姿をご覧になって、在天の英霊も頼もしく思われたに違いない。

今回も、奥山道郎隊長と陸軍士官学校(53期)で同期生だった牧 勝美氏が元気なお姿で参列された。今年で104歳になられたが、今も現役で音訳ボランティアをされているそう。隣に座っていた度會伸昭氏(全日本空挺同志会理事)が、空挺隊の先輩・奥山隊長の士官学校時代の思い出を、真剣な面持ちで聞いていらつしやるお姿が、とても印象的だった。「落下傘の絆」は、真に強く尊いと感じた。

慰霊祭後、義烈空挺隊員が通っていた「観音湯」に連れて行って頂いた。当時のままではないが、今は閉店してしまつた銭湯の庭に祀られた普賢菩薩像が気になつていたので。そこには、像を建立された堤 ハツさんのご遺志を守ってお

祀りを続けられた堤 幸子さんが一人で住んでいて、何年も前になるが、慰霊祭の時には、空挺隊員の皆様がお参りに来られていた。その時、幸子さんが嬉しそうにお世話をされるお姿に、私は義烈空挺隊員の方々とハツさんを重ねて見ていた。幸子さんは施設に入られたようで、いつも綺麗な花が供えられていたお堂や副碑の周囲は草が生い茂り、寂しさを覚えた。この像が、英霊とハツさんの思い出と共に消え去ってしまった事、今も心から祈っている。



永田氏とご遺族

第57回豫科練戦没者慰霊祭に参列して

評議員 原島淳子

令和6年5月26日(日)、元土浦海軍航空隊跡地であり、海軍飛行豫科練習生の練成が行われた地である、現陸上自衛隊武器学校(茨城県稲敷郡阿見町)内において斎行された第57回豫科練戦没者慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

慰霊祭は、ご遺族・同窓生・来賓等々大勢の参加者が参列する中、式典開始のアナウンスにより、式次第に沿い粛々と進められました。

主催者である、公益財団法人海原会副理事長(式典実行委員長)星指隆氏による開式の言葉に続き、陸上自衛隊武器教導隊隊員による国旗掲揚・海上自衛隊下



総教育航空群隊員による儀仗(弔銃)・陸海自衛隊員による献火が行われました。

その後黙祷・阿見詩吟会師範による奉

詠、海原会理事長宮本忠明氏による、「豫科練戦没者皆様の真実を皆に語り継ぐ事の重要性は、揺ぎ無く国の平和を考える上で最も大切な原点でなければならぬ」という想いのこもった祭文と進み、来賓代表による献花・ご遺族代表による玉串奉奠・来賓挨拶と続き、乙飛23期 井上萬二氏による「未曾有の困難に純然と祖国の安寧を念じて、身を弾丸とし艦に体当たりし散華していった、特別攻撃隊の崇高な精神は永久に至上に称えるもの。青春を投げうって一途に戦い死に赴いた若き一人一人の戦友達の純真さを記録に残してほしい。自分にできる事があれば、命の限り尽くしていきたい」と言う同窓生ならではの厚い想いの籠った追悼の言葉がありました。続いてご遺族代表、甲飛第10期 力山茂樹海軍上等飛行兵曹 弟 力山清司氏による、お兄様の学生時代のやんちゃなエピソードや入隊後の足跡、平成23年には、ご自分で小型飛行機を操縦し、クラーク国際空港を離陸しお兄様が墜落したであろう上空を旋回したとの話をされたご遺族の言葉・海原会行方参与による遺書朗読・

陸上自衛隊施設学校音楽隊による奉納演奏・阿見町婦人会有志による奉納舞踊と続き、星指実行委員長の閉式の辞で無事慰霊祭は終了いたしました。

終了後は、参列者全員による菊一輪の献花が行われました。

晴天の陽ざしの中行われた慰霊祭、今年は受付等お手伝いの中に、女子高校生の姿がありました。豫科練を知ってお手伝い下さったのかと思うとても嬉しかったです。卒業して・就職してと環境が変わると、お手伝い下さる事も難しくなってしまうかもしれませんが、これからも続けていきたいと思います。そう思いました。また、お友達や周りの方達にも豫科練の事を伝えていただければとも思いました。今年と同窓生の方の追悼の言葉がありました。私に沢山の事を教えて下さった、沢山の書物を下さった大事な方達が、コロナでお会いできないうちに在りしのお仲間のところの旅立って行ってしまいました。この豫科練の聖地に足を運び、慰霊祭に参列させて頂いたと、その方達の在りし日の姿が目に見え、ここから見えるそう思えてなりません。同窓の方達も先に征ったお仲間逢いにここに来ているのではないのでしょうか。

戦後79年、当時の事を話して下さる方も悲しいかなくなってきました。

若くして散華された方達の事を語り継ぐためにも、沢山の地にこの地にある雄翔館の事を伝え、一人でも多くの方に来館していただき、若い方達にも、昭和の時代にこんな人達がいたんだと言う事を知っていたらと切に願って止みません、皆様もどうか周りの方達に話して下さい。若くして散った方々のために。

最後にこの句を捧げます。

海空に

散りゆく花よ

永遠にあれ



豫科練之碑



哀惜の碑

第54回指宿海軍航空基地「哀惜の碑」追悼式に参列して
専務理事兼事務局長 石井光政

海軍記念日の令和6年5月27日(月)、54回目となる「指宿海軍航空基地追悼式」が鹿児島県指宿市に於いて、指宿海軍航空基地哀惜の碑頭彰会会長 指宿市長 打越明司 様の執行で、厳粛に執り行われました。

当日は高齢者避難警報が発出されるほどの大雨で、本来は指宿海軍航空隊の跡



指宿老人福祉センター内に設けられた祭壇

地に出来た、指宿国民休暇村の敷地内にある「哀悼の碑」前で執り行うところ、場所を市役所近くの指宿老人福祉センター内に移して行われました。(雨は断続的に降っていたが、式に先立って、「哀悼の碑」に参拝してから会場に向かった。哀悼の碑には、この地を飛び立った特攻隊員82名を含む、戦没者192名が祭られている。)

センター内では神棚が用意され、大雨

にもかかわらず、約60名が参列して、定刻午後3時に開式。黙祷ののち、神職による神事が執り行われ、打越会長の心の籠った慰霊のことに続き、会長、指宿議会議員代表、福祉協議会代表とご遺族代表による玉串奉奠が行われ、神職退場により、神事が終了。その後、ご遺族、生存者、指宿市各界の代表者をはじめとし、参列者全員が献花をし、最後に献詠を奉納して式は滞りなく終了しました。警報級の大雨にもかかわらず、戦争で亡くなられ、今の日本の礎となられた方々に、感謝と哀悼の誠を捧げに來られた多くの方々と、追悼式を挙行された打越市長以下の指宿市役所の方に敬意を表します。

なお、追悼式に配布された資料の中に、指宿図書館で指宿海軍航空基地の資料展示をしていますというお知らせがあったので、追悼式に参列されていた、下吹越かおる館長にお願いしたところ、休館日にもかかわらず開けて下さり、拝見することが出来ました。これまで、航空隊の展示は無かったが、指宿の地から飛び立つて、国や家族のために亡くなった方々のことを、後世に伝え、風化させてはならないという下吹越館長の強い想いで展示が始まったもので、当時の基地の門表を

はじめ、基地の建設にかかわる資料等、貴重な資料が展示されていました。指宿を訪ねる機会があれば、哀悼の碑だけではなく、指宿図書館にも寄っていただきたいと思います。



指宿図書館内の展示

なくなる。大変生意気であるが、南方の戦場で、幾度となく死と隣り合わせの運命に遭いながら生き残れた体験から述べた。自分が宇宙の意志を帯びた魂の存在であることに気づかされ、生涯を魂主導の生き方で歩んできた。

私の健康・長寿と生きがいには充ちた日々の本を正せば、海軍に志願入隊した1年間の凄まじい鍛錬と3年余の戦場での体験が土台になっている。むべなるかな。自分の意志で決めたことが、素晴らしい運命をつくったのである。もし、それがなければ、今の私はあり得ない。運命は自分で開くものだといえる。

多田野語録 希望は失望に終わらず

会員 多田野 弘

表題の「希望は失望に終わらず」は、何を意味しているのだろうか。希望というのは、一度か二度実現できなかったかということ、費えるものではない。奮起して何度も挑戦せよといっているのではないか。私の生涯を、この機会に振り返ってみたい。

希望の萌芽は、少年期に見て取れる。家で教科書を開いたことがないのに、小学校の成績が席次1番だった。私には恵まれた素質を与えられていたのだろう。幼いながらも、皆と違っている良い面を

伸ばし、自分の将来をつくっていかうと思つた。

中学入学に父の勧めもあったが、競争率8倍に魅かれて、大阪の職工学校に入学を決めた。それが私の生涯にわたる仕事の発端となった。卒業すると間もなく徴兵検査があり、陸軍は2年、海軍は3年の義務があった。丁度その頃、海軍に1年間で済む志願制度を知り、徴兵1年前だったが志願した。早く社会で自分の力を試して見たかった。世間では「誰も嫌がる軍隊に志願する馬鹿がいる」と囁かれていた。昭和14年10月横須賀海軍航空隊に入隊した。

海軍は「殴つて教える」所だとは聞いていたが、聞きしに勝る猛烈を極めていた。通常3年間の教育訓練を1年で済ますのだから当然だと思つて耐えた。そのおかげで、培われた不屈不撓の心身は、私の生涯をつくる基盤になっている。

昭和16年10月、召集令状が来て谷田都航空隊に入隊した。2か月後、日米が開戦、すぐ第一線への配置を上司に申し出た。隊員では私一人だった。この決断が、その後の3年余、南の戦場で死の洗礼を受ける羽目になるとは、「お釈迦様でも気が付くまい」。しかしながら、戦場で「の壮絶な体験から得た多くのエッセンスが、戦後の生き方を貫く精神的支柱となつ

た。

その一つは、かつて過ぎた海軍入隊初期のきびきびした生活が懐かしく、その再現を希望した。まず、毎朝アラームなしの5時起床を課した。ところが思いがけない効果があった。一日中「気合いのこもった」充実した気持ちで過ごせるようになり、自分をコントロールできた喜びは、他のいかなる喜びより大きいことを知った。その喜びから、次々と厳しい課題に挑戦した。

20年ほど前には100歳を超える人は珍しく思えたが、今は多くの人が100歳を超え「人生100年時代」が常識になっている。知らないうちに常識は変化している。その時代遅れの常識からは、創造的行動は生れるはずがない。つまり、常識を外れた非常識から、独創的行動が生まれるというのである。戦後、元旦の寒中水泳を49年間93歳まで続ける等、自らに挑戦する非常識な行動が、現在103歳の長寿と健康をつくってくれたと感謝している。少年期に、皆と違つて良い面を伸ばし、将来をつくりたいと希望したことが原点だった。自らの道に絶えず希望をもち、「弛まず」挑戦していくことよって、どのような挫折や絶望に置かれても、必ず希望の光が見えてくる。

抑止力の戦史的觀察

中垣秀夫

1 全般

空挺同志会の松尾辰蔵・熊本県支部長から「今年も義烈空挺隊慰霊祭の慰霊の詞をお願いします」と頼まれた。そこで

「今年は何を書こうか」と考えつつ、

「例年と同じように、①義烈空挺隊の壮絶なる突入は内外に大きな衝撃を与え、

②米軍は我が軍の忠烈の凄まじさに畏怖の念を強くし本土決戦回避に傾いた、③

我が国民は大いに士気が高まり、一億総玉砕の決意を新たにした……等は外せないな。一方、空挺と特攻の違いにも言及すべきかな」との思いを巡らせていた。

そこへ護国神社の坂本泰彦宮司から電話があり、「特攻隊員として亡くなられた方々は美談として語り継がれるだけで、現在の我が国の防衛に役に立っていないのだらうか」と訊かれた。私は「確かに

大東亜戦争の勝ち負けだけに着目すれば、大死のように見えるかもしれないが、特攻隊員の国家への熱い忠誠心は今日の自衛隊員が宣誓で誓うところの『事に臨んでは身の危険を顧みず……』の生きた模範であり、具体的にイメージアップ（思い浮かべること）が出来る映像です。そして更に重要なことは、特攻隊員の決死

の覚悟と壮烈な死は我が国の抑止力となつて現在も機能しています」と応えた。その事例として後述するノモンハン事件の説明をした。そして電話を切った後、以下のことを考えた。

戦前戦中、人口に膾炙した詩句がある。「天（てん）勾踐（こうせん）を空（むな）しゆうすること莫（なか）れ

時に范蠡（はんらい）無きにしも非ず」つまり「天は句踐を見捨てない、時がくれば范蠡のような忠臣が出て助けてくれる」という意味である。これは南北朝時代に書かれた40巻からなる『太平記』の第4巻に出てくる児島高德（こじまたかのり）作の詩句と言われている。後醍醐天皇が企てた鎌倉幕府討伐のための計画が未然に暴露し、天皇は京都近郊の山中に逃れたが、翌年捕らえられ隠岐に流された。児島は流される途中の行在所に忍び込み、この句を桜の幹に彫り込んで天皇を励ましたと伝えられている。要するに、「天は後醍醐天皇を見捨てない、時が来れば忠臣が出て助けてくれる」という意味であり、引いては大東亜戦争において日本は劣勢であるが、「天は日本を見捨てない、時が来れば忠臣が出て助けてくれる」という国民の願いである。

そうは言いつつも、他力本願のような

希望的観測が、兵士や国民の自己犠牲の要求へと繋がり、国家や軍の施策として特攻を助長したのは遺憾である。国家のために生命まで犠牲にするという個人の思いは尊崇を受けるべき立派な志であるが、国家や軍中央が国民と将兵個人に求め、前提として作戦を計画・実施するなどは邪道である。国家や軍中央はあくまで「優勝劣敗」を原則として軍事を司るべきであり、国民の願望や希望を頼りとしてはならない。つまり、これらの思想が究極的に行き着くところは「日本は神の国だからイザというときは神風が吹く」である。しかし、遂に最後まで神風は吹かなかった。面白いことに、この空想は戦後、正反対に姿を変えて左翼の人間を蝕んでおり、「日本には平和憲法があるから戦争は起きない」との呪文となつて継承されている。言われている内容は真逆であつても、イメージされる映像と雰囲気は「空想」という同一の概念である。つまり左翼の学者とマスコミは空想を真剣かつ真面目に信じ論じているのである。

参考のために付言すると、句踐は春秋時代の越の王であり、会稽山の戦いで呉王夫差に敗れた（「会稽の恥」）が復讐を誓い、「臥薪嘗胆」で富国強兵を図り、遂に呉を滅ぼした。この部分は、

中国の歴史書『十八史略』の中で最も活き活きと描かれる場面で、傾国の美女「西施(せいし)」、「狡兔死して走狗烹られ、高鳥尽きて良弓蔵る(狡賢い兔が死ねば獵犬は煮て食われ、飛ぶ鳥がいなくなれば良い弓は仕舞われる)」、「越王の容貌が長頸烏喙(首が長くて口が嘴のように尖っている)なので、苦難を共にできても歓楽は共にできない」等、日本でも多くの故事・熟語・慣用句が知られている。

話を元に戻すと、では特攻としての行為やその精神が全く無駄だったのかというところ、そうではなく、現在に至っても抑止力として機能しているのは間違いない。令和4年12月、閣議決定された安保三文書が示す我が国への差し迫った脅威について、「中国の対外的な姿勢や軍事動向は我が国と国際社会の深刻な懸念事項、北朝鮮の軍事動向は我が国の安全保障にとり、従前よりも一層重大かつ差し迫った脅威、ロシアはウクライナ侵略によって国際秩序の根幹を揺るがし、欧州方面では安全保障上の最も重大かつ直接の脅威であり、中国との戦略的な連携と相まって、安全保障上の強い懸念」であると明示された。しかしそうは言っても、この三つの脅威のいずれに対しても、核を持たない我が国が独力で対処することは不可能で、日米同盟を主軸としつつ、民主

主義国家群と共同・協力して対処しなければならぬ。左翼の間には「日米同盟は戦争に巻き込まれるから破棄すべき」との論があるが、もし日本単独で防衛を成り立たせるとしたら、恐らく今の防衛予算の10倍位は必要であろう。核兵器も保有しなければならぬ。核には核しか対抗できないからである。しかし、そんなことをしたら防衛より先に国家経済が破綻してしまう。しかも現代において最も重要な安全保障政策は、侵略や紛争の発生を未然に防止すること、つまり「抑止」である。この「抑止」と言う機能を働かせるためには、国家レベルで考察する場合、直接的には防衛力整備と自衛隊の精強化及び日米同盟の強靱化であるが、間接的には外交力、経済力、科学技術力、人口、地理的環境、国内統治力、国民の士気、伝統・文化等のあらゆる要素が効いてくる。そして忘れてならないのは、過去の日本人の歴史の実績も機能しているということである。

かつて防大教授(戦史講座主任)として戦史を研究する中で、「ああ、これが抑止力として現在も機能しているのか」と気が付き感嘆したことがあった。具体例を挙げれば、ノモンハン事件、英スリム中將の回顧録、沖繩戦、特攻、義烈空挺隊等である。

2 ノモンハン事件

ノモンハン事件については、私はCGS(指揮幕僚課程Ⅱ)かつての陸大に相当)とAGS(高級幹部課程)の研究論文でも取り上げ、相当に研究を積んだと自負している。ところで、外務省出向時代(昭和58〜60年)、次の興味深い体験をした。

当時の国連や在外公館のロビー外交で「どこの国の軍隊が一番精強か」と話題になったことがある。結論は「ゼネラルは米国、将校はドイツ、下士官は日本、兵隊は韓国」であった。米独はNATOで公開演習をやっており、韓国軍はベトナム戦争で蛇や蛙の生息する沼に沈んでおり理解できる。ところが日本はまだこの当時、PKOも日米共同実動演習もしていないのに何故だろうと疑問に思った。

結論は「世界中の軍学校でノモンハン事件が研究され、ジュエーフの報告書や回想録が読まれていたためではなからうか」と思い至った。極端に言えば「ノモンハンでの第一線の勇戦敢闘、韌強な闘いぶりが、現代の日本の抑止力の一翼を担っていた」のである。

ノモンハン事件は、我が国よりむしろ米国やNATOの軍学校において研究され学ばれた。何故なら、ここには当時のソ連軍の戦いの様相と戦術・戦法の萌芽が全て含まれているからである。そのよ

うな観点から東西冷戦が強く認識されるに従い、各国陸軍はソ連軍を模範とする場合にせよ、対ソ連戦のモデルとするためにせよ、ノモンハン事件から現代的な戦術・戦法を学んだ。そしてその当時採用された思想や戦い方は、その後も研究と改良を重ねられ、今日の世界中の陸軍へと受け継がれている。

また更に特筆すべきは、これまでの兵学の常識では殲滅戦生起の条件は、攻勢衝力の逆用にしろ、敵の過失に乗ずる場合にしろ、いずれも相手側によつて作爲されるとされてきた。従つて、そのような条件・場面を作り出すことが作戦の主眼であつた。ところが、ノモンハン事件におけるソ連軍の戦法は、第二次世界大戦の独ソ戦において完成したトハチェフスキー元帥の教義と戦術・戦法の萌芽が見られる。別の見方をすれば、ノモンハン事件はソ連軍現代化の実験場であつたと言える。具体的には膨大な近代兵站に支えられた殲滅戦方式、全縦深同時打撃(第2梯隊)、二重包囲、両翼包囲、諸兵連合部隊と戦車・装甲車・飛行機との協同等により、主動の地位を確保する今日の陸軍国家の戦術で強調される戦い方が、既に昭和11年の「赤軍野外教令」で示され、それが昭和14年の8月攻勢で実行に移されたのである。

一方では、日本軍はソ連が考えていた

より精強であつた。ノモンハンで軽く一撃を食らわせ、ポーランド侵攻(ヒットラーとのポーランド分割合意)に専念する積りであつたスターリンにとつて、日本軍の頑強さは想定外のことであつた。ノモンハン事件においては、戦力比がソ蒙軍の方が4.5倍であつたのに、損害は2千人以上多かつた。ソ連側が公表したノモンハン事件の評価は、次のとおりである。①社会主義国の経済力、軍事力を誇示した。特にソ連の軍隊は、戦闘能力、兵器、指揮官の優秀性を世界に示した。②ソ連軍は、自己の国際的義務への忠実性、ソ連邦と蒙古人民共和国の強固な地位及び国境の不可侵性を保証した。③ハルハ河畔におけるソ蒙軍による日本の第6軍の撃破は、日本帝国主義に対する中国及び朝鮮民族の民族解放運動に深い感化を与えた。④ソ連を日本との戦争に引き込もうとする帝国主義反動の計画は、西欧における場合と同様失敗に終つた。

これを読む限り、ソ連は日本に勝利したと公表しているが、実際はソ連の政府及び軍首脳は日本軍の「手応えの強さ」には肝の冷える思いであつた。ノモンハン事件のソ蒙側指揮官であつたジュコーフは晩年、回顧録の中で「自分は生涯を祖国の戦争に捧げた。我が生涯で最も苦しい戦いは、ハルハ河での日本軍との戦

いであつた」と述懐している。ジュコーフは、36才で師団長、42才で大将・ソ連邦英雄、49歳で地上軍総司令官・ソ連邦元帥になつたソ連陸軍のスターである。そのジュコーフがノモンハン戦直後、スターリンに「日本軍の訓練精到、規律の高さ、戦闘の頑強さ、特に若い指揮官と兵士たちの優秀さ」を報告している。この若い指揮官とは、前後の文脈から「小隊長クラスの初級将校と班長クラスの下士官」と読み取れる。

ところで、大東亜戦争の戦況の切迫に伴い、日本軍は関東軍の精鋭師団、航空部隊を次々と南方へ転用した。ソ連は米軍から対日参戦の要請を早い時期から受けていたが、日本の敗色がハッキリする昭和18(1943)年までは応じようとしなかつた。そして、対日参戦に際しては、ソ連の情報網で関東軍がモヌケの殻であることを承知していたが、それでも、独ソ戦の参謀総長であつたワシレフスキー元帥のもと80個師団、158万を動員して、ようやく開戦に踏み切つた。これらのことは、ノモンハン事件の印象がソ連にとつていかに深刻な印象を与えていたかを物語っている。ソ連軍首脳には、「ノモンハンで勝つた」というより、「日本軍はとんでもなく勦強だつた」という印象の方が強烈であつた。

戦後日本は、世界に類をみない僅かの

自衛力をもって平和と安全を享受して来た。特に、冷戦崩壊までの50年間、色々なことがあった中で、北海道の防衛をわずか4個師団(5万)の勢力で、極東ソ連戦域軍36万を抑止し得たことは、軍事専門的に見れば驚きである。この抑止・防衛の根源は、何であろうか。その要因は、日米安保体制と我が自衛隊の存在であることは間違いない。しかし、強調しなければならぬのは、「ノモンハンにおいて困難な状況下に勇戦奮闘した日本軍将兵の血と汗の代償」も要因の一つであるということである。それが、冒頭の国連と在外公館ロビーで言われた「下士官は日本」という評価に繋がっていたのである。つまり、ハルハ河畔の土となった将兵の死は、決して無駄死ではなかったのである。もちろん、だからと言って、今後、我々が防衛力整備の不十分、情報軽視、兵站の軽視あるいは作戦指導の失敗を隊員の血と汗で償えるのでは決してない。作戦の失敗を第一線将兵の血と汗と決死の覚悟で償うようなことは兵法・軍法の邪道である。

いづれにしても、1世紀近くも前に勇戦奮闘した将兵の働きが、現代の抑止力に繋がっているという見方は、多分、本稿が世界で初めてかもしれない。しかし、私は自信を持って、このような見方があ

3 スリム中将の回顧録

NHKは令和4年8〜10月にかけて、「NHKスペシャル」として「絶望の戦場 ビルマ」を放映し、その内容を翌年8月に同題名の図書として発刊した。その中に英第14軍を指揮しビルマを奪還したウイリアム・スリム司令官(中将)によって戦後描かれた次の回想録の一節が紹介されている。

スリム中将は日本兵の精神力に対して「日本軍の強さは、個々の日本兵の精神にあつた。日本兵は死ぬまで戦い続け、行進し続けた。500人の日本兵が陣地を守るよう命じられたとしたら、我々はその陣地を奪うまでに495人を殺さねばならなかった。そして、陣地を奪われた最後の5人は自決するのだ。この従順さと獐猛(どうもう)さの組み合わせが、日本軍を非常に手強いものにしていった」と高く評価する旨を述べている。一方で日本軍の将校については、「日本軍の指導者の根本的な欠陥は“道徳的勇氣の欠如”である。計画が失敗し、練り直しが必要であることを認める勇氣がない。彼等は命ぜられた任務が不可能であることを十分に知りながら、自分自身が受けた命令をそのまま部下に伝えた。このような責任転嫁が、最高司令官から最下層の将校まで、何度も災いの連鎖を生んでいった」と述懐している。

いづれにしても、このような日本軍兵士の強靱な戦闘場面がスリム中将によって英文で紹介され、何らかの形で今日の日本の抑止力に繋がっていることは間違いない。

4 沖繩戦

米軍は昭和20年3月17日までの硫黄島での激戦に引き続き9日後の3月26日、沖繩本島西方の慶良間諸島に上陸し、本島攻略のための後方基地を築いた。そして米軍は319隻の戦艦と巡洋艦などから艦砲射撃を開始、4月1日、本島中部の嘉手納海岸に上陸した。この作戦に参加した米軍は、上陸部隊約18万3千人、支援の海軍部隊を含めると約55万人の規模で、太平洋戦争史上、最大の上陸作戦だった。これに対し、沖繩本島に配備された日本の総兵力は、陸軍約8万6千人、海軍の陸戦隊約1万人に過ぎなかった。現地の第32軍は、中南部の首里を中心に構築した陣地にたてこもり、持久戦に徹する方針を採った。

米軍は、上陸初日の1日だけで約6万人が上陸、同日中に北と中(現在の読谷、嘉手納)の両飛行場を制圧、4月3日には本島東海岸に達し、沖繩本島は米軍により南北に分断された。この飛行場が早期に米軍の手に落ちたことは、大本営はじめ各方面に大きな衝撃を与えた。第32軍にしてみれば、持久戦が当初からの

狙いであつて予想通りの展開であつたが、大本営にしてみれば「何故反撃に出ないのか。消極的に過ぎる」と非難轟々で、大本営は4日、北・中飛行場の奪還を強く求める電報を打った。結局第32軍は総攻撃を決断し、数次にわたる攻撃を実施したが、いずれも強大な米軍によつて撃退されたのみならず、戦力の半分を損耗し、結局、4月22日に退却を決定した。

6月4日頃までに、第32軍は摩文仁の新陣地に集結したが、撤退作戦は悲惨を極めた。6月23日、牛島司令官と長参謀長が自決し、沖繩戦は事実上終結した。戦死者は日本兵約10万人、県民も約10万人が犠牲になった。

一方の米軍は約2万人が戦死し、約6万人が負傷した。沖繩戦直前の硫黄島の戦いにおいて日本軍約2万人が戦死したが、米軍は7千人が戦死し2万人が負傷した。米軍は離島とはいえ日本領土での余りの損害の多さに驚くとともに、来るべき本土決戦に際しては「どれほどの多くの若者の血が流されるのか」と畏怖した。これらの事実は記録として残され、参加した将兵により語り継がれた。それはそのまま、今日の抑止力の一翼を構成している。また似たような話で海自ではよく知られた次の話がある。海兵隊の退役将校(大佐)が戦後、「ペリリュー島で日本軍と戦った本官は、太平洋戦争後

に親日家となつた。何故なら、もう2度と日本軍とは戦いたくないからだ」と語つたとの由である。

5 特攻

沖繩戦において米軍は空と海でも凄惨な戦いを強いられた。米国の研究者の推定では「特攻により約120隻の米艦船が沈没、約3千人の米兵が死亡し、約6千人が負傷した」と発表している。そして米兵は「狂信的な自爆戦術」として恐れた。

昭和20年3月24日、沖繩戦で特攻を受けた元海軍のマックス・パイン氏は平成19年、米紙に「自分たちの船が標的にされていると悟つた瞬間の気持ちは、とても言葉で表現できない」と証言した。また太平洋上で特攻機に2度、回天に1度、攻撃を受けた元海軍のジェラルド・W・トーマス氏は、退役軍人の団体機関誌への寄稿で「パニックに陥つた艦上の射手が味方の戦闘機に発砲したり、射程外の特攻機にやみくもに発砲したりした」と述べている。

昭和20年4月5日、小磯内閣は総辞職し、鈴木貫太郎に組閣の命がくだつた。その翌6日、航空特攻「菊水一号」作戦参加の陸海軍機が、鹿屋や知覧など九州各地、台湾の基地から、沖繩周辺に群がる米軍艦船を目指して出撃した。6日だけで222機が出撃、340人が戦死し

た。その中には学徒動員された大学生も多かつた。7日は90機、140人、12日に109機、193人、16日に157機、344人……。特攻は、沖繩での地上戦闘が終結した後も8月まで続けられることになる。昭和19年10月、大西瀆治郎海軍中将が主導し、フィリピン・レイテ海戦で「統率の外道」として始まつた体当たり攻撃が、沖繩戦では遂に作戦・戦闘の“主役”となつたのである。

以下は私の持論であるが、戦いに参加する将兵が個人として自らの生命を犠牲にして国や家族のために準ずるのは尊敬に値する崇高な行為・心情である。だからこそ、自衛官は現在も任官するにあたり、「事に臨んでは身の危険を顧みず：と宣誓するのである。戦場にあつては当然、必死の覚悟が求められることが多いだろう。そして、その場へ従容として臨むには個人としての覚悟や死生観が求められる。人々はその気持ちを尊敬し感謝するのである。しかしだからと言って、片道分の燃料しか搭載しないと、爆弾を抱えて敵艦に体当たりすると、必死を前提とした戦いを国や部隊が個人に要求するのは邪道である。ましてや、それを「死中に活を求めろ」などと美化した言葉で誤魔化して、作戦として採用するなど絶対にあつてはならない。兵士の命を軽んずる風潮は、結局は国民の命

を軽んずることに通じ、最終的に原爆投下を招き、竹槍で戦車や戦闘機に手向かわせる非合理性へとつながってゆく。

『特別攻撃隊』（特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編）によると、3月中旬から終戦までの間、沖縄方面での航空特攻の戦死者は、陸海軍計3千人にのぼり、航空特攻の全死者の8割近くに達した。絶え間ない特攻機の攻撃に、米軍は混乱に陥った。沖縄・慶良間諸島の停泊地には、特攻による損傷艦があふれ、米機動部隊指揮官のミッチャー中将の旗艦も損害を受けた。沈没したのは、駆逐艦などの小型艦ばかり26隻だったが、損傷艦は空母など164隻に上るとされる。菊水作戦では、人間爆弾「桜花」、練習機「白菊」も出撃した。一方では「桜花」を胴体下にぶら下げて重くなった一式陸攻などの母機は、米グラマン戦闘機の格好の餌食となった。特攻隊を送り出した第5航空艦隊の宇垣纏司令長官は、日記『戦藻録』に、「特攻隊として機材次第に欠乏し、練習機を充当せざるべからざるに至る」と記している。速成に次ぐ速成で、やっとな飛べる程度の技量しかない若者たちが練習機を操り、リーダーと敵戦闘機の迎撃と対空砲火をくぐり抜け、体当たりしようとしたのである。

そして4月5日、連合艦隊は戦艦「大和」以下の第二艦隊に対し、海上特攻と

して沖縄に突入することを命じた。第二艦隊の伊藤整一司令長官は当初、作戦とはいえない無謀な挙だと納得しなかった。しかし、草鹿龍之介参謀長が「一億総特攻のさきがけとなつていただきたい」と述べると、伊藤司令長官は吹っ切れたように「それならば何おか言わんやだ。了解した」と応じた。「大和」の沖縄特攻を最初に主張したのは連合艦隊の神重徳、首席参謀だった。彼は「大和が残れば、無用の長物だったと言われる」と訴え、豊田副武連合艦隊司令長官もこれを聞いて了承した。

戦艦「大和」は日本人及び日本海軍にとつてシンボルであり、「カミカゼ」特攻隊や「戦艦ヤマト」はこれ以外にも、多くの映像やアニメとして世界中で繰り返して取り上げられている。本稿を執筆している最中に「宇宙戦艦ヤマト」が製作50周年を迎えると聞いて、その人気の長寿さに驚くとともに、日本はもろろん世界中で受け入れられている事実には「ソフトパワー」の威力を感じる。織田邦夫・元空将が何かの雑誌に書いていたが、中国人民解放軍の大佐が「日本が魚釣島で中国にちよつかいを出すなら中国は日本に攻め込むぞ。静かにしとけ。日本は憲法で何もできないだろう」と日本人を馬鹿にして脅したそうである。しかし、大佐はしばらく考えて「いや、待てよ。日

本には特攻がある。特攻が攻めてくるな。特攻なら間違いない攻めて来る」と自問自答したとの由であった。このやり取りの真偽は別にして、このような噂は結局は我が国の抑止力の一角を形成している。

また更に言えば、ウクライナのゼレンスキー大統領が米国上院で演説した際に、日本の真珠湾奇襲攻撃を9・11テロと並べて批判したが、産経新聞が「止むを得ず開戦に至った真珠湾攻撃を弁解のしようのない卑劣なテロと並べるのはケシカラン」と論陣を張っていたが、世界的に見れば、「宣戦布告なしの攻撃開始はテロと同じだ」という理屈かもしれない。ただ世界中の庶民にとつては両者とも恐怖の対象であることに違いはなく、更にアラブ・イスラム社会では真珠湾攻撃の映像は、今でも大喝采を浴びる場面であると聞いている。

6 義烈空挺隊

前述したように、米軍は4月1日、沖縄上陸開始の日に北中飛行場（現在の読谷と嘉手納）を占拠した。沖縄の第32軍は5月中旬、本島南端の喜屋武（きやん）半島への撤退を迫られていた。そのような中、「米軍が占領した北と中飛行場に航空機で強行着陸し、基地を制圧すべし」との命令が「義烈空挺隊」に下された。同隊は、サイパン島の米軍基地を破壊するため、奥山道郎大尉を指揮官として昭

和19年12月に編成されたものの、中継地に予定していた硫黄島が陥落したため待機を命ぜられた。次に硫黄島への投入が検討されたものの、天候気象や彼我の戦況推移予測から中止となり、またも待機が続いた。義烈空挺隊は陸軍第6航空軍に所属していたが、出撃には大本営の許可が必要だった。大本営の許可を得るため、菅原道大(すがはらみちおう)第6航空軍司令官が願ひ出た文言は、「特攻隊に指定されてすでに半年、計画しては取りやめになること再三に及ぶは、その心情忍び難い」というものだった。これを見る限り、彼には出撃させることだけが目的で、作戦がもたらす効果を十分に考えた形跡はない。あたかも「特攻」で死ぬことが作戦目的となつていように見える。

余談であるが、ここで空挺作戦と特攻の本質的な違いを明らかにしておきたい。空挺作戦は基本的に地上部隊と提携する戦略的な運用形態であり、敵中に降下しても帰還することを前提としている。ところが、特攻は帰還することを想定しておらず、必死の作戦である。いづれにしても、隊員個々に決死の覚悟が求められることには変りがない。沖繩戦の場合、地上軍の第32軍も6月23日に玉砕しており、提携できたか否かの記録も残されていないが、もし提携できたとしても帰還

は想定できなかった。そういう意味では、菅原中将の言う特攻の概念の方が当たつていたのかもしれない。

第6航空軍は義烈空挺隊投入の機会を伺っていたが、4月中旬になって沖繩の米軍飛行場の強化が進むと投入の好機と考えて、大本営に使用の許可を求めた。大本営が義烈空挺隊の投入を容易に許さなかつたのは、5月3日に開始された地上軍の総攻撃が失敗に終わり、勝利の見込みの薄い沖繩に日本陸軍最精鋭の義烈空挺隊を投入するのは惜しいと考え、来る日本本土決戦のために温存しておこうという目論見があつたからである。菅原中将は「特攻隊に指定されて既に半年、計画しては取りやめになること再三に及ぶは、その心情忍び難い」と決断を促した。また義烈空挺隊指揮官の奥山道郎大尉は「空挺隊として若し未使用に終わるようなことになつては何の顔(かんばせ)あつて国民に相まみえん。当局の特別な保護と、世上の絶大な尊敬に対して、武人の最期を飾るべき予期の戦場さえ与えられないとなると、国民国家に対して顔向けができようか」と早期投入の覚悟を吐露した。

このようにして義烈空挺隊の投入が決定され、昭和20年5月24日夕、12機に分乗して熊本の健軍飛行場を離陸、同日午後10時過ぎ北飛行場に5機が突入した。

1機が胴体着陸に成功、13人の戦闘隊員は、拳銃、手榴弾、短小銃又は機関短銃、柄付爆薬、破甲爆薬等で武装しており、地上の米軍機を破壊した。戦果については、日本側には記録が残されていないので、米軍の記録に依らざるを得ないが、それによると、「海軍攻撃機3機、哨戒爆撃機2機、輸送機4機を破壊、F4戦闘機22機、F6戦闘機3機、B24爆撃機2機を損壊、7万ガロンの燃料を消失した」と記録されている。ちなみに、7万ガロンというのはドラム缶1,300本分に相当する。

義烈空挺隊の壮絶なる突入は内外に大きな衝撃を与えた。米軍は我が軍の忠烈の凄まじさに畏怖の念を強くし、本土決戦回避に傾き、我が国民は大いに士気が高まり、一億総玉砕の決意を新たにした。義烈空挺隊員として、持てる力を全て出し尽くして散華された英霊の崇高な勇姿を永く後世に伝えることは我々の使命である。現在の日本の平和と繁栄が英霊の方々の尊い犠牲の上にあることを想い、改めて感謝と崇敬を表する次第である。

いづれにせよ、歴史学者としての立場から、特攻隊員及び義烈空挺隊の壮烈な戦闘は米軍に強烈な印象を与え、各種のアニメや映像として世界中に広まり、今日の我が国の抑止力に寄与していると信じている。

連載 山ある記27 群馬県「荒船山」

会員 池田康博

関越道の下り車線からチラッと左手に視線をやると、遙か長野の方向に空母のような平たい山頂部を持つ山が見える。荒船山である。日本のテーブルマウンテンとも称されているらしい。最近、テレビの番組で、この山には「経塚(きょうづか)山」と言う山頂部があることを知った。その場所はタンカーで言えば、丁度、操舵室の部分になる。

臙岩 (荒船山)



実は、30年ほど前、荒船山に登ったことがある。しかし、それはタンカーの部分、臙岩(ともいわ)

という所までであった。そこで改めて経塚山まで登るべく、登山口である標高千六十七mの内山峠にやってきた。

朝8時に登山口駐車場に着いた時には

20台分のスペースは埋まっていた、止むを得ず道路際に駐車して8時10分に出発した。尾根道を上り下りしながら、荒船山の取り付き部に当たる「一杯水」と呼ばれる水場に着いたのが9時15分。

ここから頂稜部までは崖になっていて、ロープや鎖を補助にジグザグに登って行く。タンカーの舷梯を登るようなイメージだろうか。20分程登ってその一端となる臙岩の西端に着いた。

山上の遊歩道



ここからは平坦な林の中を臙岩の方向に歩くと、避難小屋の先に展望できる場所が現れた。そこが

臙岩の先端部に当たっていて、数メートル先は落差二百mといわれる絶壁である。過去には転落事故も発生している所であるが、展望は大きく開け、近くには浅間山、遠くは雪を頂いた北アルプスや乗鞍岳が望めた。しばらく絶景を堪能した後、船尾の方向、経塚山に向かって出発。避難小屋の脇を通って、林の中を遊歩道の

経塚山 (荒船山) 山頂



ような平坦な道を行く。途中には小さな沢や、花を咲かせたクリンソウの群落もある快適な道である。臙岩から一緒になつ

た地元のハイカーが、戦時中、軍がここに飛行場を作ったものの、完成と同時に終戦となった事。中曽根元首相の不沈空母発言の元は荒船山であることや、この山に伝わる神話、地元語り継がれている話など、色々な話を聞かされながら10時23分、いよいよ頂きへの登りに掛かり、同32分に標高千四百二十三mの山頂に着いた。

山頂部は狭く、周囲は木々で囲まれ展望は利かないが、それでも木の葉越しに北岳を見ることができた。

10時52分に下山開始。同じ道を辿って、避難小屋まで戻り、ゆっくり昼食と大休止をとって、再び下山開始、13時30分に駐車場に着いた。

(令和4年5月29日)

顕彰譜 (16)

会報 134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第十六回目です。

陸海軍航空



京都府久世郡久御山町烏田堤外
NTT 淀グランド内

京都航空機乗員養成所
昭和53年4月16日



米子航空機乗員養成所
昭和51年6月11日



宮崎県都城市都原町市営住宅
団地公園内

都城航空機乗員養成所
昭和60年4月21日



鳥取県米子市両三柳 2603
陸上自衛隊米子駐屯地内
写真提供 陸上自衛隊米子駐屯地



福岡県八女市亀甲
西日本短期大学付属高等学校 内

写真提供 西日本短期大学附属高等学校



筑後航空機乗員養成所
昭和58年8月21日

空 挺

義烈空挺隊顕彰碑



建立の由来

全日本空挺同志会では、義烈空挺隊の遺勲を後世に語り伝えるため、沖縄に建碑を計画した。初めこの部隊が突入した読谷飛行場に建てようとしたが、進入路がなく人目につき難いので、島の南端摩文仁の台の上に建てることにして、現在慰霊公園になっている地域の一番高い処に土地を取得し、昭和51年にこの碑を建立した。

主碑の石は熊本の高峯山から掘出したもので、義烈空挺隊が出撃した健軍飛行場の西に聳えるのが高峯山である。「義烈」の文字は、奥山隊長の書き遣した筆跡を拡大して刻んだ。

約一三〇坪許りの敷地があり、入口左側に副碑があつて、その表には「義烈空挺隊讃」なる一文を銅板に刻して嵌め込み、裏面には第三独立飛行隊も含めた全戦死者の名前を、同様に銅板に刻んだ。

義烈空挺隊が突入したのは5月24日であるが、毎年この日の前後の日曜日に全日本空挺同志会沖縄支部の主催で慰霊祭を行っている。

この敷地及び碑の所有者は全日本空挺同志会であるが、日常の管理は（財）沖縄県戦没者慰霊顕彰会に委託してある。なお全日本空挺同志会とは旧軍の空挺部隊と自衛隊空挺部隊に関係ある者の団体である。

義烈空挺部隊讃

秋ソレ昭和二十年五月二十四日夜敗色既ニ濃キ沖縄戦場読谷飛行場ニ突如強行着陸セシ数機の爆撃機アリ 該機ヨリ躍り出タル決死ノ将兵ハ飛行場ニ在リシ多数の敵機及ビ燃料弾薬ヲ爆砕シ混乱ノ巷ト化セシメタリ 為ニ飛行場ノ機能喪失スルコト三日間ニ及ビソノ間我が航空特攻機ハ敵艦ニ対シ至大ノ戦果ヲ取ムルヲ得タリ
コレ我が挺進第一聯隊ヨリ選出セラレタル義烈空挺隊及ビ第三独立飛行隊ノ壮挙ニシテ両隊将兵百十三名全員ココニ悠久ノ大義ニ殉ゼリ

後ニ続ク者ヲ信ジ日本民族守護ノ礎石トナリシ将兵ノ霊ニ我等何ヲモツテ応エントスルヤ
昭和五十一年五月二十四日
全日本空挺同志会



読谷飛行場跡にも木製の柱を建て毎年お参りしている。

所在地

沖縄県糸満市

摩文仁慰霊公園内

建立

昭和51年5月24日

慰霊祭

6月初旬の土曜日

問合せ先

千葉県船橋市薬田台

陸上自衛隊第一空挺団広報班内

全日本空挺同志会事務連絡所

(〇四七一四六六一二二四一)

空 挺



出撃の地、熊本・健軍にある義烈空挺隊之碑



健軍飛行場出撃直前の義烈空挺隊

義烈空挺隊之碑

(発進地健軍飛行場の碑)

建立の由来

昭和20年5月24日夕に義烈空挺隊が発進した熊本の「健軍飛行場」は戦後熊本飛行場(後に空港)として使用されたが、昭和32年には陸上自衛隊健軍駐屯地託麻原分屯地が開設された。その一隅に「義烈空挺隊之碑」が建立された。

発起人は義烈空挺隊の生存者である熊本県在住の村上信行氏(元陸軍中尉)で、建立に先立つ昭和40年5月24日に託麻原分屯地内において有志による慰霊祭を挙行、さらに日本の落下傘部隊の戦友会の性質を引き継いだ全日本空挺同志会熊本支部長・源川正氏の呼びかけに応じた全国の遺族、戦友の努力が実り「義烈空挺隊之碑」は建立され、除幕式を行ったのは昭和40年7月28日の事である。

石碑は高さ約50cm、厚さ約20cmの御影石で作られており、義烈空挺隊突入の地、沖繩の北・中両飛行場跡地から採取された霊石が祀られた。石碑は後に空港の一角が住宅地となる為、健軍駐屯地内に移設され、同駐屯地の自衛隊員が自主的に清掃・管理している。平成28年の熊本地震で一部が倒壊したが、有志の手により速やかに復旧された。

行事としては年に一回出撃の日、5月24日の前後において全日本空挺同志会熊本支部が主催の「義烈空挺隊出撃慰霊祭」が執り行われている。

所在地 熊本県熊本市東町

陸上自衛隊健軍駐屯地内

建立 昭和40年7月28日

問合せ先 陸上自衛隊健軍駐屯地

西部方面総監部 広報室

写真提供 陸上自衛隊健軍駐屯地

空 挺

空挺部隊将兵之墓



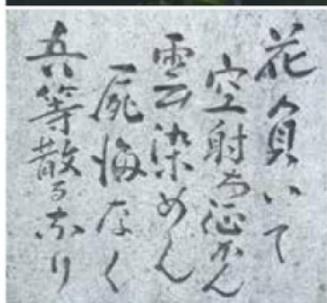
この墓は陸軍空挺部隊戦死者一万二千柱の墓所として、建立にあたり
 霊名簿を地下に納めてある。従つてレイテ作戦において特攻隊としてド
 ラッグ、タクロバンに降下した者及び沖繩作戦の義烈空挺隊もその中に
 含まれている。



所在地 和歌山県伊都郡高野町高野山内
 管理者 全日本空挺同志会
 建 立 昭和31年9月
 菩提寺 不動院
 建立者 空挺戦友会
 慰霊祭 毎年9月
 写真提供 全日本空挺同志会

空 挺

空挺落下傘部隊発祥之地の碑



碑の台に刻んである

護國神社の例祭と共に行われるが、その際に落下傘部隊の戦友も多数参加している。

嘗てこの地には陸軍挺進部隊の兵営と広大な降下場があった。レイテに特攻出撃した高千穂降下部隊（挺進第三、第四聯隊）も、義烈空挺隊の母隊である挺進第一聯隊も、この地に在って訓練に励んだ。

陸軍挺進練習部の構内には、挺進神社があって、空挺部隊一万二千の戦死者及び殉戦者をお祀りしていたが、戦後米軍によって焼払われてしまった。そこで、昭和24年地元川南村の護國神社が再建されたとき、空挺部隊の戦死者もその中に合祀した。

更に昭和38年になって、生き残りの戦友達の手で、護國神社の裏庭にこの碑を建立した。



川南町護國神社例祭

所在地 宮崎県児湯郡川南町川南
 建立 昭和38年
 例祭 毎年11月23日
 主催者 川南町

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 山峡の 底の宿屋の スズラン白

● 深緑を 一輛トコトコ マイペース

● 徳利や 避寒の卓に ゴロ寝せり

● 木の芽漬 酒のつまみを 猫背かな

松花江

● いくつもの つらき別れを胸に秘め

南に向かい 君は飛び征く

淳子



● ちゃんとやれ 昔激励 今パワハラ

● 夏が来た 夏痩せ期待 このお腹

ネコ

事務局からの報告等

一 第七十三回特攻平和観音年次法要の齋行について

恒例の特攻平和観音年次法要が令和六年九月二十二日(日曜・秋分の日)の午後2時から世田谷山観音寺特攻観音堂において、駒繫神社との神仏習合により齋行されます。

例年、秋分の日は九月二十三日ですが、今年には九月二十二日ですのでお間違いないようお願い致します。

この年次法要の詳細につきましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、会員以外の方も多くの皆様方、お誘い合わせの上、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

なお、本年次法要に参列を希望される方は、同封の「郵便払込取扱票」の出席欄に○印を付し、お布施(二名分三千元)をお払込みください。

知人等同伴される場合は、同伴者のお名前もご記入ください。

二 「靖國カレンダー」の幹旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を幹旋致します。来年のカレンダーは同封のチラシをご覧ください。

ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額(送料込み)を記載して申し込んでください。ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

三 次号会報の発行日

次号の令和6年11月号は、10月25日にフィリップスのマバラカット飛行場跡で齋行される特攻隊慰霊祭の記事を掲載するため、発行日が11月半ばころになります。

四 会報記事の訂正について

・会報一五〇号(令和6年5月号)21頁写真解説

誤 矢萩
正 矢矧

五 寄付者御芳名(敬称略)

(令和6年4月1日〜6月30日)

(単位千円)

三〇〇 御船 茂

四七 武藤 裕志

二七 伊藤 雅敏

一七 布施木 昭

一二 小林 博史

一〇 戦歿学徒慰霊祭実行委員会

一〇 浮世 喜昭

一〇 廣川 恭子
一〇 石橋 幸一

七 服部 武志
七 齋田 伊佐夫

七 中島 尚史
七 若月 良介

七 田中 雄一郎
五 小林 稔

五 島崎 宗勝
五 泉井 秀二

三 中郷 一英
三 岩浅 博之

二 水町 博勝
二 櫻村 保貞

二 吉満 正広
二 早坂 正子

二 北村 孝嗣
一 増田 健一

六 新入会員名簿(敬称略)
(令和6年4月1日〜6月30日)

岩手 八重畑 龍一

群馬 上野 太樹

埼玉 増田 健一

千葉 中郷 一英

大板 博

比留川 多賀子

東京 矢野 康男

小林 洋

東京

角田 美紗

千原 通和

島谷 基信

佐藤 美雪

佐藤 睦子

中島 朋宏

会沢 一之

羽毛田 高嗣

嶋田 章三

貝川 直子

小田 理恵

濱田 隆人 (6・2・2)

松本 敏夫

山崎 俊太郎

中山 誠一 (4・10・16)

高田 透 (6・6・4)

荻谷 登

橋口 俊一 (6・6・23)

福井

長野

愛知

熊本

七 会員訃報 (敬称略)
ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
 - ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
 - ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他
 - ・全国護國神社への特攻像の奉納・建立
- 年会費
- ・一般会員 3000円
 - ・学生会員 1000円
- URL: <https://tokkotai.or.jp>
- QRコード



ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
 - 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
 - 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
 - 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
 - 5 会員以外の方の投稿も歓迎致します。
 - 6 投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。
- T10210072
東京都千代田区飯田橋一丁目5-7
東専堂ビル2階
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4596
E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp

